
Sea side Art clubber

伊藤 美優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sea side Art clubber

【Zコード】

N4388W

【作者名】

伊藤 美優

【あらすじ】

Sea side Art Clubの続編が満を持して登場！
しあさい高校の美術部に入部した斎藤サイトは一学期の修了式を迎え、初の全道大会に挑む！個性豊かな部員達が繰り広げる新感覚文科系ストーリー。

毎日更新を目指して頑張ります。作者ブログも絶好調掲載中！

Re・スタート！（前書き）

まさかの第2部スタートです。よろしくお願いします^_^

Re・スタート！

季節は7月の後半、セニがおおきな声で鳴き始め潮風が夏の薫りをつれてくる。今日はしおさい高校一学期修了式だ。

斎藤サイトは他の生徒達と一緒に体育館に集められ、校長先生の長々とした話を立つたまま聞かされていた。

サイトは隣の列に並んだ1年2組の松野良風まつのよしきかぜに話しかけた。

「なあついに明日だな。」

「うん。もうだね。明日からだね。」

サイトの前に並んでいた大和健もうんうんと頷いた。

「明日から合宿だな。そしてその後は全道大会。どんな感じになるか楽しみだな。」

松野の後ろに並んでいた高城条一郎たかじょうじょういちろうが言った。その様子を見ていた3組の高木秀院たかぎしゅういんが冷やかした。

「おい、お前らほんと仲良いよな。夏休みなんだから外に出てあそべつづーの。男連中だけでシコシコやつてたつてつまんねーだろ。」

高木はサイトが自己紹介の時に直腸の件を馬鹿にしたキャラキャラグループのひとりだ。大和はこの生徒が嫌いらしく、

「うぜえ……手淫のくせに……」と近くのサイトに聞こえるか

どうかの小さな声で文句を言った。・・・全国の秀院さんにあやま
れっての。

「「」の前の発表会では負けちゃったけど、今度は負けないよサイト。
毎日部活にてて絵を描いてるからね。」

松野が鼻からふー、と息を噴き出しながら今回の大会に向けての意
気込みを語った。松野は発表会の後少し落ち込んでいたが

最近は気持ちを入れ替え新しい絵の描き方にトライしているようだ。
サイトも言い返した。

「こないだの発表会はデモンストレーションだからな。全道大会で
入賞したヤツが一番上手いんだよ。とりあえず今回も優勝してやつ
かな。」

サイトの大口に美術部員が「おお～言つねえ～」と仰け反り返った。
サイトは本当は自信がまったく無かつた。発表会で優勝できたのは
まったくのマグレだつたし、発表会が終わつてから美術部には「練
習は自由参加」というような空気が流れ始め、発表会で苦汁をなめた

松野以外は放課後の部活にあまり参加しなくなつていた。やはり明
確な目標がないと人間という生き物は頑張れないのだと、廊下で

会つた時条一郎が言つていた。いつの間にか松野の隣にやつてきた
1組の美術部員神崎智紀が言った。

「まあ俺達の目標はとりあえず道南大会で入賞して全道大会に行く
ことじやね？まあサイトと自称天才の松野クンは

もつと上にいくんでしようけどね~「

普段は真面目な神崎がサイトと松野を冷やかしたので美術部員以外の生徒にも笑いが起きた。見かねて3組の担当の寺田先生が

「えー、そこ、静かにしないか。」と注意した。神崎はそそくさと自分の1組の列に戻った。ステージの上で話していた校長先生が話を締めくくるようにこう言った。

「それでは皆さん、夏休みの間、健康で真っ当な高校生らしい毎日を送ってください。私の話は以上とさせてもらいます。」

校長先生が頭をぺこりと下げると生徒達からまばらに拍手が起つた。つづいて放送部の生徒のアナウンスが響いた。

「校長先生、ありがとうございました。これからしおさい高校校歌を歌います。」

吹奏楽部と思われる生徒がピアノで校歌の伴奏を演奏し始めた。サイトは胸のポケットから出した生徒手帳に書かれている歌詞を見ながら

他の生徒と同じように校歌を歌い始めた。

朝焼け差し込む中庭と 眼下に広がる白い浜

友と並びて 歌謡^{うた}づ

文化の営み たおやかに

あふるる希望は わが母校

ピアノのアウトラが終わると「これで修了式を終わります。1年1組の生徒から教室へ戻つてください。」とアナウンスが流れたので神崎が「じゃ、後で部室でな」と言いながら体育館の入り口から出て行つた。合宿か。なんか充実した高校生活になつてきたな。

サイトは自分が入学してきた時と今の自分を比べて明らかに気持ちが明るくなつたきでいるのがわかつた。

玄関先で詠進先輩の絵に出会えてよかつた。サイトは美術との出会いに感謝しながら廊下を渡つた。

Re・スタート！（後書き）

しおさい高校の校歌は3番まであります。合宿もあるようなので、
期待ください^_^

クラスに戻ると1年3組の生徒達は各自に夏休みの計画を友達と話し始めた。前の席の大和と馬鹿話をしているサイトにクラスメイトの山里マキちゃんが話しかけてきた。

「サイト君。あのね、明日近くで花火大会があるんだけど一緒に行かない?もちろん他に何人も来るけどみんなにサイト君を紹介しようかなあと思って。 . . . どうかな?」

マキちゃんはサイトが自己紹介した時に口に手をあてて笑っていた女の子だ。クラスで一番の人気物で、清楚で性格の良い生徒とかわからなかつたがこいつ答えた。

「あ、あしたなんだけど、俺達美術部、合宿があるんだよね。だから明日はちょっとなあ、」

サイトが頭を傾げていると大和も残念そうな顔をしていた。お前は誘われてないつちゅー!。クラスを歩き回っていた高木秀院が口を挟んだ。

「マキ、そいつらは鉄の絆で結ばれた仲だからあんまり無理に誘わないほうがいいぜ。そんなヤツラより俺達と一緒にいこーぜ。」

秀院が親指を後ろの方に指すと、後ろに座っていたチャラチャラグループが「おーい」と声を挙げた。マキちゃんは恥ずかしそうに

「残念だね。また誘つてもいい?」とサイトに聞いた。サイトは「あ、ああ。いいよ。」と動搖しながら答えた。いわゆる「社交辞令」と

「いやつだらうか。マキちゃんがチャラチャラグループの方に行くと大和がちつ、と舌打ちをして、

「手淫のやつ……調子こきやがつて……コクのはマスだけにしどけよ……」と珍しく怒りを露わにした。大和は授業中に秀院に「とやまけん」というあだ名をつけられてから秀院とチャラチャラグループを敵視するようになっていた。ぶつぶつと不満を言つていう大和をなだめていると教室のドアが開き担任の寺田先生が入ってきた。日直の木田君がみんなに静かにするよう言い、ホームルームが始まった。

「えー、みんな明日から夏休みが始まるわけだがしおさい高校のひとりとして自覚を持つた行動を、」

「せんせー、今田はみんな予定があるので短めにおねがいします。」

秀院が先生を冷やかすとクラスに笑いが起きた。これにはサイトも一緒に笑った。寺田先生の長話のせいでの度部活に行くのが遅くなつたことか。寺田先生は「ほん、と咳払いをすると

「そうだな。今日ぐらいは先生も大人しくしてよ。宿題は配つてあるな?それじゃ解散!とりあえず先生に迷惑をかけるような事だ

けはやめてくれよな。」

先生が言つとはーい、と誰かが言い、クラスから勢い良く生徒達が出て行つた。サイトも大和と一緒に美術室へ向かつた。今日は大島先生と

ノマ部長から明日の合宿についての説明があるそうだ。高揚した気分を抑えられない生徒が廊下で大声ではしゃいでいた。

合宿ミーティング

サイトと大和が美術部に入ると、1組の神崎が先に来て前の方の机に座っていた。神崎があれ？今日は早いね、とサイトに言つと

美術部の去年の活動記録が載つたアルバムを見せてくれた。大和と一緒に覗きこむと「合宿のおもひで」とノマ部長の字で書かれた文の上にピースサインをする美術部員達が写つた写真が載つていた。数えてみると11人の生徒が写真に写つていて6人の現3年生以外はみんな卒業した先輩たちだらう。神崎が言つた。

「去年の合宿についてなにか資料はありませんか、つて大島先生に聞いたらこのアルバムを貸してくれたんだ。サイト、あんまり馬鹿騒ぎするなよ。」

「俺はそんなキャラじゃねえよ。それより松野とかの方がある意味危険じやね？普段、密閉された空間で活動してるからさ。あ、条一郎もテンション上がるとはつちやけそうだよな。」

3人ではしゃいでいると「誰が暴れそつだつて？」と言いながら松野と条一郎が教室に入ってきた。神崎が松野を見ると

「まつちゃん、興奮して地元の女子高生に手をだすなよ～」とからかつた。松野は

「僕はそんなキャラじゃないよ。それより条一郎のほうが、」とさつきサイトが言つていた事と似たようなことをいいだしたので

部室が笑いに包まれた。そんなことをしているうちに3年の先輩が次々と部室に集まり、美術部の1学期最後のミーティングが始まった。

前の方に1年生、後ろに3年生という感じ座った部員達に黒板の前に立った佐々木ノマ部長がチョークで大きな字を書いた後振り返つてこう言った。

「それでは合宿の場所を発表します。今回の合宿地は函館…」

後ろの席の鶴野舞先輩がわざとらしく「お～」と声を挙げた。実は事前のみんな今回はどこで合宿が行われるか知っていた。函館はウチの

学校から大体30分くらいだ。先輩の話によると函館の宿泊施設に泊まり2日間自由に絵を描くらしい。俗に言つ「写生大会」というヤツで2日目は美術部顧問の大路地先生がクロッキー講座を開いてくれてみんなに絵の描き方を教えてくれるそうだ。クロッキーってなんだ?ノマ部長に質問すると棒に墨をつけて描く絵のことだそうだ。へえ、そんな描き方もあるのか。ノマ部長の話が終わると

舞先輩が口を開いた。

「昨日は降水確率10パーセントだって。うわ、29度もありやがだから」

「明日は降水確率10パーセントだって。うわ、29度もありやが

るよ。」

三上悠人先輩が携帯電話を見ながら言った。本土と違い、7月に最高気温が30度を超えることが珍しい道南では

外で絵を描くには厳しい状況になるだろう。日焼け止め買わなきやな〜といつてはいる舞先輩を横目に美術部代表で英語教師の大島先生が切り出した。

「明日は9時に恵港に集合ね！1分でも遅れたスチューデントは乗せていつてあげないからね！ハツハツ〜！」

何が面白いのかわからないがとりあえず遅刻はNGだそうで、絵を描くのに必要な道具を持つてくる」と、おやつは300円までとか明日の持ち物について大島先生は説明してくれた。先生の話が終わるとノマ部長が

「じゃー今日のところは解散！みんな明日は遅れないでね〜」

そういうふうでみんな部室を後にした。今日は部室にクーラーが付くため業者がくるらしい。サイトは学校にクーラーが付くなんて

非現実的だと思っていたがこれは大路地先生のポケットマネーで付くことになったらしい。先生、グッジョブです。

サイトは階段を降りようとしている伊達詠進先輩に声を掛けた。

「先輩、明日はとうとう待ちにまつた合宿ですね！先輩達の絵、楽

しみにしてまやー。」

サイトがさつらつとした声で言つと詠進先輩は難しい顔をしながら、
「うそ、明日は僕らひとつて最後の合宿だからね。おおここ楽しむ
ことにするよ。」

と作り笑いを浮かべながら言つた。こつもの詠進とは明らかに様子
が違つたがサイトは真夏の陽気でそのことに気付かなかつた。

合宿//－トライング（後書き）

合宿では函館に行くついでです。どんな感じになるか、楽しみだな（日本語変）。

ノマの畔田

次の日サイトは恵港と呼ばれると宿の待ち合せ場所である港に立っていた。

恵港は海岸通りにある休憩所のひとつでマリーンスポーツや函館に向かう人などがたまに立ち寄る程度で辺りには

ほとんど人が居なかつた。待ち合せの時間より早めに来てしまつたらしい。サイトが周りを見渡していると公衆トイレから

ノマ部長がお腹をさすりながら出でてきた。サイトが挨拶をすると、ノマ部長は恥ずかしそうに手を振つて挨拶を返した。

「ちよつと、早く来すぎちゃいましたね。他に誰も来てないみたいですし。」

サイトが言つと、ノマ部長が

「わー、ワリネコがいるー。サイサイ、ちよつと行つてみよう。」

といつてサイトのシャツの袖を掴んで待ち合せ場所と反対側の海岸の方に歩き出した。サイトは相変わらずのノマ部長の突飛な行動に慌てながらすんずんと歩く女の子と青い海の上を飛ぶ鳥を見つめた。裾から手を離すと彼女は言つた。

「ねえ、ウミネコつて、こやこやーー鳴くからウミネコつてこうんだってー。知つてた?」

無邪気に笑う部長を横田に、

「あれはカモメじゃないですかね。」とサイトがいい、「いや、ぜつたいいウミネコだつて！」「鳴き声以外に見分け方つてあるんですねか？」

「へへへ……」ノマ部長が少し黙つた後に目線を対岸の釣り人に移しながら言つた。

「サイト君だつて？発表会の時ネコの絵を描いたの？」

ノマ部長の急な問いかけに少し驚いたがサイトは発表会の緊張感が蘇つた。はいそうです。というとノマ部長が続けた。

「わたしも一年生の発表会の時ネコの絵描いたんだ。あの時は1票も入らなくて帰りにひとりで泣いちゃつたなー。」

突然の告白に驚いたが、サイトはノマ部長がなぜ自分に投票してくれたのかがなんとなくわかつてきた。

「1番票が入つたのつてサイト君だつたよね？先生やみんなもすごいってホメてたよ。あたし達がいなくなつても大丈夫だよね？」

サイトの口からえつ、と言葉が漏れると後ろの方から車のエンジン音と大島先生のカン高い声が響いた。

「あなた達、こんなところにいたのねー早く乗らないと置いていくわよーハツハツー！」

サイトとノマが大島先生の白のハイエースを見るともう他の部員達は全員車に乗り込んでいた。どうやら少しだけ待ち合わせポイントを間違えていたらしい。ノマ部長が助手席に乗り、サイトが1年生部員に部長と2人つきりでいたことをからかわれながら後ろの席に座つた。

12人乗りのワゴン車が畠宿地である函館を田舎して動き始めた。

お題せつめい（論議文）

この小説とあわせてブログもやっているので興味のある方はのぞいてみてください。

函館に向かう車に乗った美術部員達はそれぞれにおしゃべりを始めた。函館に行くのはひさしひさしぶりだの、緊張しそうで気持ちが悪いだのおもいおもいに部員がしゃべっていると大島先生が急に振り返って発言した。

「みんな、絵を描く道具を持ってきた？・・・まさかフォゲットしてきた生徒はいないわよねー」

舞先輩が代表して「はーい、みんな持ってきてまーす。」と手をぶらぶらさせながら答えた。短めのスカートに右手薬指に指輪、匂いの強い香水をつけていた。この先輩は函館で男でも引っかけるつもりなのだろうか。山田^{やまだ}亜^あいこ^い子^こという女の先輩を挟んで隣の三上先輩が言った。

「いやー詠進、俺達も今回で最後の合宿だねー。高校生活最後の夏を満喫しようぜー」

色付きメガネに花柄のシャツを着てニヤニヤしている三上とは違い、詠進は時々考え込むような仕草を見せていた。が、一年生達は

そのことに気付かず松野の変な服装にツッコミを入れていた。

「だから今時ベレー帽にネルシャツは無いって。まつんのせいでも俺うりまで変なヤツらだと思われんじゃん。」

「絵を描く時はペレーフは必須でしょ。それに田よけにもなるし便利なんだつて。」

いつも通り神崎と松野が口げんかを始めたので、サイトは「あ～もう、つきあつてらんねえな！」と言い、持ってきたPSPの

起動スイッチを引き上げた。隣でバイオレンス漫画を読んでいた大和がPSPの画面を覗き込んで言った。

「あ、ワンダーハンターの最新ゲーム買つたんだ・・・今度俺も買うから一緒に通信プレイしようよ・・・」

ワンダーハンターとは今月発売したばかりのPSPソフトだ。母の知り合いから「臨時収入」が出たため6000円近くもするゲームを買つことができた。そしてその話には続きがあり、

「お母さんね、サイトがこないだの発表会で優勝した事をみんなに話したら知り合いの1人が油絵セットを譲つてくれたの。これで사이트もみんなと同じ様に油絵が描けるよね。」と書いてサイトに油絵セットをくれたのだった。

サイトは最初のうちはすく嬉しかったが、譲つて（中身は新品だつたため買った物だる）くれたのがアイツだというのに勘付くと少し複雑な気持ちになった。俺はそんなことぐらいいじやお前にはなびかねえぞ。まあ今度の大会ではありがたく使わせてもらつけどね。

サイトは独り言を言いながらPSPをしまい、今回の合宿の写生大会で使う水彩セットと画用紙がちゃんと準備できるかチェックし

始めた。

ぼうっと外を眺めていた条一郎が「おい、函館には「いつたぞ」と言い、矢印のような頭をしたイカの看板を指さした。

函館はイカの名産地？らしい。どことなくエキゾチックな雰囲気がある町並みを通り車は急な坂道の途中にある宿泊施設の駐車場に入った。

すると宿泊施設の係員らしき人が出迎え、笑顔でおじぎをした。今回2日間お世話になる施設の

名前は「ひまわり」という名で、全道大会に訪れる文化部の宿泊拠点として営業しているらしい。今回の宿泊の運営費は部員達の

部費の他に生徒会による活動予算から支払われていた。特に今年は詠進先輩が去年全国大会出場を果たしたため例年よりも多めの予算がでたようで「みんな、伊達君に感謝しなさいよハッハッ」と大島先生が車の中で言っていた。

部員達が車から降りると冷房が効いていた車内とは違いうだるような熱気が夏の日差しから感じられた。まだ昼前なので写生会を

始める頃にはもっと気温が上昇しているだろ。全員が施設内のスリッパに履き替えて廊下に集まるこの「ひまわり」の代表と思われる壮年のおじさんと

あいさつがてら大島先生は話始めた。話が長くなりそうなのでサ

イトは隣にいた三上先輩に話しかけた。

「去年はどんな塩梅で合宿は行われたんですか？」

「そーだね、まず全員でミーティングがあつて、その後に泊まる部屋を決めてそれからみんな絵を描き始めるつて感じかなー。去年は雨だったから室内で大路地先生が持ってきた静物の模写だったけど今回はこのお天気だし外で描くことになると思つよ。帽子とか持つてくりやよかつたなー。」

と三上先輩は答え、松野が被つているベレー帽を見てふふん、と鼻で笑つた。笑われている本人はその事に気付かず玄関に飾られていた暗いタッチの崖の絵を興味津々に見つめていた。サイト達の話を聞いていた神崎が口を開いた。

「函館は観光名所だけあつて色々絵を描くポイントがありそうですね。まずこの施設の上にある函館山。この近くにあるハリストス教会。

海岸沿いにある赤レンガ倉庫。俺ん家の近所にはたまねぎ畑くらいしかありませんからね。」

神崎は自分の住んでいる菜苗町を皮肉つて笑いながら言った。サイトが思い出したように外を眺めている詠進先輩に聞いた。

「先輩、函館にはチャーミーグリーンのCMで使われた有名な坂道があるんですね？是非先輩が描いた坂道を見てみたいです！」

サイトは初めて学校の玄関先でみた詠進の「風たちぬ通学路」に出会つた感動を思い出して目を輝かせた。しおさい高校の田舎道

の坂道とは違い、チャーミーグリーンの坂は綺麗に舗装され、眼下には海が広がっているため絵のモデルとしては最適だつ。

詠進はサイトの高いテンションに押されながら「ああ、じゃあ今回はそこを描いてみようかな」と答えたため、

サイトはつおつしゃー、と歓声を挙げた。あの絵と同レベルの絵に再び出会えるのだ。まだ見ぬ大作にサイトの胸は震えた。

そういうしていのうちに大島先生とひまわりの代表の話が終わり、部員達は大きめの会議室に集められた。その部屋の中央には英字新聞を

読んでいた美術部顧問の大路地先生が座つていた。いよいよ始まる夏の合宿にセミ^{おおるじ}が号令をかけたように一斉に鳴き始めた。

合宿はじまる（後書き）

いよいよ、という感じで Sea side Art club の夏の合宿がスタートします。

この小説のタイトルの由来ですが、前作 Sea side Art club の続きという意味とシサスクに入部したサイトの物語、

という意味合いで名付けました。今後ともよろしくお願ひします。

はじまつのはじめの会図

部員達が会議室に入るとノマ部長が大路地先生に「先生！ いつの間に来てたんですか？」とびっくりしたように聞いた。

大路地先生は持っていた英字新聞を置むと、「昨日の昼から来てたわよ。ここ近くの学生の絵も観てみたかったし、なによりもここからの風景が素晴らしいくて。老後はここで暮らしましょうかね。」と笑みを浮かべながら光が乱反射する深い青の海を

見ながら答えた。大路地先生はしおさい高校の生徒以外にも絵を教えているらしく、函館の美術部員達の絵はレベルが高いと

言っていた。その学生達と全国大会への出場権を争うのかと思いつと緊張感が部員達の中に生まれた。この様子を大島先生は察知すると言ふん、と笑いながら会議室の前の方に立つてみんなに聞こえるようおおきな声で言った。

「これから *seaside Art Club* 夏の合宿を始めます！ 予定としてはこれから外で絵を描いた後、ここ、『ひまわり』で食事と入浴をして就寝。2日目は午前中に大路地先生のクロッキー講座があります。その後外で今日描く絵を完成させて修了となります。それじゃノマちゃん、あとは任せたわよ！」

そういうと大島先生は指名されてしどろもどろになつているノマ部長の横を通り過ぎて会議室の外に出て行つた。部員達が乗つてきたハイエースはレンタカーで、明日帰る時に借りる手続きをしなけれ

ばならない」というようなことを先生は車内で言っていた。

ノマ部長は隣の舞先輩と小声で話し合ひをした後、部員達に言つた。

「えーと、とりあえず夕食の時間は6時だから今日は5時くらいまで外で絵を描いて続きを明日やるって方向でいいかな？
昼食は各自自由に探ること。あーその前に泊まる部屋のメンバーを決めないとね！…タカジヨー何ニヤニヤしてんの？女の子は3人だから男子だけで部屋割りをきめてよね。それじゃわたしたちは泊まる部屋をみてくるよん」

と言い残すと荷物を持ちペたんぺたんとスリッパを鳴らしながら女子チームは上の階にある宿泊用の部屋に向かった。女子と一緒に部屋になれなくて残念がる条一郎をなだめ、残った男子部員は三上先輩の提案により、じやんけんのグー＆パーで2つの部屋を4人ずつの

グループで決めようと言つた。何回かじやんけんをして2つのグループが出来上がつた。

301号室

三上悠人 伊達詠進 斎藤サイト 大和健

302号室

大清水学 神崎智紀 松野良風 高城条一郎

部屋のメンバーを書いたメモを大路地先生に渡すと先生はにこやかに頷いた後、「すこし函館を観光していくわ」と言いバッグを抱え

外出する準備をした。あまり面識のない大清水先輩と一緒に部屋になつた神崎がきこちなく挨拶をすると大清水先輩が

「ほんとうによろしく。かんざきくん。」とキリッとした表情で返した。今日の大清水先輩はいつもの挙動不審な感じではなく、

なにか決意を決めたようなビシッとした空氣感をジユルでバッカリ固めた髪型が物語ついていた。三上先輩はにやりと笑うと

「俺達も泊まる部屋に行ってみようか」と言い、部員達は荷物を持って3階へ続く階段をのぼつた。

宿泊施設「ひまわり」の3階にあがると、廊下の窓が開いており山の木々の深い香りと磯の潮風の匂いが同時に鼻腔に流れてきた。

ちょうど海と山に挟まれているからだろう。サイト達は女子チームがいる角部屋の303号室をちらりと見た後自分達の部屋のドアを開けた。

泊まる予定の部屋は大体10畳くらいの小部屋で2段ベッドが2つあるだけの質素な洋室になつていた。ちょうど4人ずつの

グループだしどうじいだろ。荷物を置いていると隣の部屋から松野のうわー、という声が聞こえてきた。初めての合宿ということで

はしゃいでいるのだろう。三上先輩がノマ部長にもう外に出て写生会を始めてもいいのか聞いてくると黙つて廊下に出た。

部屋に残つていたサイトがカバンからキャンバスノートを取り出し

た詠進先輩に聞いた。

「先輩、今日は水彩画を描くんですか？」

「い、いや。今日はあまり時間がないから鉛筆で『テッサン』するだけにしておくよ。サイト君は水彩画かい？」

「はい！全道大会にむけて油絵を描こうかと思つたんですが2日間といつ事で水彩画にしました！大和も水彩画だよな？」

サイトが聞くと後ろにいた大和が首を縦に振った。詠進先輩が描く絵が色付きの絵ではないことが残念だったがレベルに高い先輩達と過ごせることの期間は絵の技術をあげるには絶好のチャンスだとサイトは考えていた。前回絵を描いた発表会から多少ブランクはあるがすぐにカンを取り戻せるだらう。そう思いながらサイトは大和達と一緒に水のみ場に行き、水彩セットの容器に水を汲み始めた。

1年生部員を見渡しながら神崎が言った。

「みんな、どこを描くか決めた？俺はハリストス教会を描こうと思つてるんだけど描こうと思つてるやつ、一緒に描こうぜ。」

神崎が水道の蛇口を止めるとサイトの隣にいた大和が手を挙げた。一条一郎は海岸沿いまで降りて赤レンガ倉庫を描きたいと言つた。

「松野はどうするのかと聞くと『まだ考え中』と答えが返ってきた。『単独行動で不審者と間違われんなよ』と神崎が冷やかした。

サイトもまだ何を描くか具体的には決まっていなかつた。詠進先輩と一緒にチャーミーグリーൻの坂を描こうとも思つたが今回は

建物の絵を描いてみたいと思つてゐた。こないだテレビでやつていつた「美の巨星たち」という番組でコトリロといつ画家の作品の

特集を見てサイトは建築物の絵に興味が沸いていた。夏の大会で建物を描くかどうかは今回の出来次第で決めよう。サイトがそんなことを考えながら玄関で靴を履き替えていると立ち膝でくつひもを結んでいた大和のシャツから携帯電話が落ち、水彩バケツの中に

入つたので一同は大爆笑した。大和は無言で携帯を拾い上げ、故障していないことを確かめると安心したようにほつと、息をついた。

サイトは他の部員達と分かれ、水彩セットを抱えながらセミが鳴く山の近くまで坂道を登つた。俺も一緒に教会を描けばよかつたかな。そんなことを少しだけ思いながら口の当たる坂道の中央で額に浮き出た汗をぬぐつた。

まじめの似図（後書き）

次回でやっと絵を描き始めます。長い間見てやつてください。^-^;

新たなる出会い

他の部員とわかれ、1人単独行動をとっているサイトは水の入った水彩バケツをぴちゃぴちゃと揺らしながら坂の上の住宅街を歩いていた。

何か絵のモデルになるようないい建物はないものか。サイトが辺りを見渡すとティム・バートンの映画に出てきそうなオシャレな一軒屋が見えてきた。

壁の表面にツタが生えたトンガリ頭のその家は隣の家とは明らかに違う雰囲気を醸し出していた。小さな水飲み場から青い模様の

小猫がトコトコと歩いてきて入り口の前に座り込んだ。サイトはこの家の構図を見て描くならこの家しかない!と直感的に思った。

サイトはその家の向かいの駐車場に水彩セットを置き、砂利の上に持参したマットをひいて正面の洋風の一軒屋の下書きを始めた。

時々猫が寝返りを打つ以外は特になんの変化もなく目の前の洋館と向き合えたが、ひさしぶりに絵を描き始めたのでなかなかバランスよく

家の構図を取る事が出来なかつた。サイトが戸惑いながら絵を描いているとぼーん、と大きな音が教会の方から聞こえてきた。

午後の時を伝える鐘だらう。パレットに絵の具を乗せようとしていると家のドアが開き、中からこの家の住人と思われる女の子が出てきた。

サイトはやばい、と声を挙げた。出てきた女の子は見たところ自分と同じくじこの年頃だ。それに制服を着ているといふことは近所の学校の生徒なのかもしない。少女は玄関に座っていた猫の頭をなでると、マットから立ち上がったサイトの方を見つめた。

やばい、このままだと不審者かストーカーだと思われる。サイトはどうやらかといふと人見知りをする性格だったが今回ばかりは仕方ない。

身の潔白を証明するためにも勇気を振り絞つて自分の方から少女に声を掛けた。

「あの、僕はしおさい高校の美術部員の斎藤サイトです。たまたま通りかかったらすごくセンスの良い家があつたんで描いてみようと思いまして！迷惑だつたらすぐ移動します！怪しい者ではありません！信じてください！」

サイトが身振り手振りを加えながら必死に言つと、少女は笑みを浮かべこう言つた。

「別に家の外観を描くだけだつたら構わない。私はこの家の住人の雨宮慈雨。^{あまみやじゅ}両親は今日、外出してるから、好きなだけこの家を描いてくれて大丈夫。」

サイトは目の前の少女がアニメのキャラクターのようなしゃべり方をしたので少し可笑しかつたが自分を信じてもらえたことが嬉しかつた。

雨宮といつこの家の住人はボブカットを更に短くしたショートヘア一で、毛束が外側にハネている変わった髪形をしていた。

かばんを抱え直すと整った顔をサイトに向けていた。

「絵が出来上がったら、その、私に見せてくれる?」

最後の方が聞き取りづらかつたが言葉の内容を理解するとサイトは「はい！もちろんです！」とおおきな返事をした。

坂を下つていく少女の後姿が小さくなるとサイトは緊張が解け、ふー、と息を吐きながらマットの上に座った。

他人の家を描くときはちゃんと許可をもらわなきやな。それにしても、かわいい口だったなあ。おつと、それよりも期待に答えられるだけの絵を描かないと。

猫が再び玄関に座るとサイトは新しく画用紙を取り出し集中力を高めて雨宮家の下書きを始めた。

新たなる出版（後書き）

翻富といつ女の子が出てきました。この子がサイトでどんな影響をあたえていくか、作者も楽しみです。

写生大会が始まりました。

他の生徒と別行動をとっていた松野良風は函館山の登山口の入り口まで来ていた。そこから振り返ると青い海と住民がすんでいる住宅街が

一望できた。夜になると100万ドルの夜景と呼ばれる国内きつての絶景だ。松野はここから見える景色を描くことにし、近くにあつたベンチ

に水彩セットを置くとゆっくりと腰をおろし手に持つていたペットボトルを口に注いだ。光を遮る物のないこの場所で絵を描くという事は

日差しとの戦いになりそうだ。松野は絵を描く準備を整えると鉛筆を風景に向け、大体の構図を測つた後キャンバスノートに下書きを始めた。

発表会の後、松野はその結果に納得がいかなかつた。絵の技術では間違いなく自分が一番だつた。それは絵の作者である自分以外の

人が見ても確かだ。それなのに優勝することが出来なかつた。不安を打ち消すようにキャンバスに油絵を塗りたくつた。そんな荒れた心では人を感動させる絵は描くことはできない。といわんばかりに松野の絵は方向性を失つたバランスの悪い絵になつていつた。誰も参加

しなくなつた美術室の真ん中で松野が頭を抱えていると、きい、と

ドアが開き3年の伊達詠進先輩が教室に入ってきた。

松野は先輩に挨拶をすると、再び自分の絵に向かって絵を描き始めた。詠進先輩はイスに座つて黙つて松野を見ていたがしばらくして口を開いた。

「松野君、君はやっぱり今回の結果に納得していないのかい？」

松野は聞こえないようなふりをして筆を握った。

「みんな君の絵を認めていいよ。実際君に票を入れたのは顧問の大路地先生と、最初は君の絵を馬鹿にしていた舞君。君が他の1年生と比べて1番絵がうまいのはみんな承知の事実だよ。」

松野は突然自分が褒められたのでびっくりしたがどうしても気になつていた事を詠進先輩に聞いた。

「伊達先輩は、どうしてサイトの絵に投票したんですか？」

松野はおぞるおぞる声をだすと詠進はすこし考えた後こう言つた。

「サイト君の絵は他の1年生の絵と比べて構図のとり方が絶妙だった。それに他の1年生の作品が一つの対象を描いていた事に対してあの絵は鏡を見る猫と鏡の中の猫の2つの対象が描かれていた。本人は単なる偶然だと思っているけどこれは狙つて描けるようなことじやない。僕はサイト君のセンスを評価して彼に投票したんだ。」

松野は詠進がちゃんとした理由をもつてサイトに投票したことがわかつて自分が抱えていた最大の疑問が解消した。

するどどこからともなく涙が溢れてきた。泣き顔を詠進先輩に向か
ながら松野は言った。

「先輩すいません。ぼく、詠進先輩がサイトと仲良しだから票をい
れたのかな、と思って。えぐつ、先輩は僕の絵がきれいだからぼく
に投票しなかったのかな、って思つて。疑つて、ほんとにすみませ
んでした。」

泣きじゃくる松野の肩にぽんと手を置くと詠進先輩は言った。

「松野君。君のアートライフは始まつたばかりだ。ときには壁に
ぶつかることもあるだろつ。でもその壁を乗り越えてこそ真の喜び
が待つてゐるんだ。今回の結果をバネにして頑張つてくれ。」

詠進の言葉を受け取ると松野は「はい！ ありがとうございます！」
と涙を拭つて返事をした。松野がある日の放課後の出来事を思い出
して

いると教会の方からぼーんといつ鐘の音が聞こえた。もう自分の絵
や人を疑つたりしない。僕は自分のやり方で全国大会を目指す。

松野は固い決意ともにキャンバスノートに筆を走らせた。

松野と詠進（後書き）

この回は前回の大会でサイトが優勝した理由がわかる話なので、2部が始まつたらぜひ書きたい、と思っていた話のひとつです。次話からすこしへース緩めます^ ^ ;

大和の過去（前書き）

大和・神崎話です。

大和の過去

「おい、やまちゃん、あれ見てみろよー。」

神崎と一緒に教会の絵を描いていた大和は神崎が突然教会の上の方を指差して叫んだのでその指先を追つた。

教会の上の鐘がある場所におじさんが歩いていき木槌のよつなもので鐘を大きくぼーん、と叩いた。腕時計で時間を確認すると午後の0時

を指していた。大和はフフッと笑うと自分が描いていた絵に鐘を叩いた教会の関係者らしき人物を描き足した。

そのおじさんは満足した表情を浮かべ踵を返して歩き出すと大和達の視点からは見えなくなった。その様子を一挙手一動見ていた神崎が言つた。

「へー、ああやつて人力で鐘を突いてるのか。いいもん見させてもらつたわー。」

大和もうんうんと頷くと神崎の腹の虫がぐうぐう鳴き始めたので彼らは「ンビニで買ったサンドイッチを食べ始めた。大和のリュックから

車内で読んでいたバイオレンス漫画が出てきたので気になつていたことを神崎が大和に聞いた。

「やまちゃんはほんとそーいう漫画好きだよなー。なんかそーいう

世界にハマるきっかけとがあつたわけ?「

大和はフフフと笑つたあと聞きたい?と言つてきたので神崎は教えてよ、と言つた。

「俺が幼稚園の時近所のアパートで殺人事件があつて……犯人は捕まつたけど死体が見つからなかつたんだ……俺が1人で近所の公園で遊んでいたら……プラン「みたいにぶら下がつたタイヤの中に……女の死体の一部が……」

「イヤ…………もつやめてッ!ほんとッそういうの、わたしムリだからッ」

神崎と大和と一緒に昼食を食べていた山田蛍子先輩が大和の話の途中でいきなり大きな声で叫んだ。神崎があざんとしていると蛍子先輩は

耳を塞いでどこかへ走り出してしまつた。ニヤニヤと笑みを浮かべている大和に神崎は尋ねた。

「なあ、いまの話、ほんと?」

「う・そ」

口を突き出して大和は笑つた。神崎はやれやれ、と額に手を置くとすっかり遠くの方に逃げてしまつた蛍子先輩を呼び戻しに行つた。

大和の過去（後書き）

仕事が忙しいですが、頑張ります！

フィーチャリング条一郎2（前書き）

更新記録が途切れました。仕事が忙しくなる。。。まさかの条一郎回ふたたびです。暖かい目で見てやってください。

フリー チャーリング条一郎2

やあ、俺はしおさい高校美術部一年の高城条一郎だ。

俺は宿泊施設「ひまわり」の近くで絵を描くという他の一年部員と別れひとり海岸沿いの赤レンガ倉庫と呼ばれる観光名所を描いていた。

ときおり観光客らしき人に写真を撮つてもらえないと尋ねられる以外は誰も俺のことを気にせず俺の近くを通り過ぎていった。

山の方からぼーん、と0時を告げる鐘がなつたので近くでボートの絵を描いていたノマ部長と一緒に飯を食わないか、と誘われたが、サイト達に見つかって冷やかされるのが嫌だったから断つた。ちょっと後悔している。

俺がなれない手つきで筆を動かしていると近くで女の笑い声が聞こえた。声の主は舞先輩で、どうやら地元の学生らしき3人組に声をかけられたらしい。いわゆるナンパってヤツか。

俺は筆を置き、舞先輩が3人組に対してどういう態度をとるのか観察することにした。もし、「はあ？ あんた達の分際であたしに声をかけてきなさいよね！」なんて言つたら面白くなりそうだ。

いや、もしそれで3人組みがキレて舞先輩に掴みかかりでもしたら

俺が助けに行かなきやならないのか？それは少し怖いな。

あれ？舞先輩がポケットからペンを取り出してメモ帳の切れ端になにやら文字を書くとそれをひとりに手渡したぞ。そいつはうい、と

紙を握った手を上に擧げるとにやにやしながらその場を立ち去つていつた。？？？もしかして連絡先を書いたメモを渡したのか？

あの先輩、合宿にまで来て男を引っ掛けようつてのか。とんでもないぞ チ女だな。俺は気分が少し悪くなつたがこないだの発表会の事もあるし、再び真剣に絵を描くため田の前の赤レンガ倉庫と向き合つた。

サイト達美術部員が外で写生大会を行つているとあたりがしだいに暗くなり始め、5時を知らせる「赤トンボ」のサイレンが鳴つた。

部員達は宿泊施設「ひまわり」に戻り、あまり豪勢とは言えない夕食を食べ、決められた時間内に入浴を済ませそれぞの部屋に戻つていつた。備え付けの浴衣に着替えた三上先輩がみんなの顔を見渡しながらにやにやして言つた。

「さあ、みんな夜も更けてきたし好きな女の子の名前でも挙げてくか。詠進は誰？」

「おいおい。そんな質問に真面目な詠進先輩は答えないだろう。サイトが思つていると短パン姿の詠進先輩がいつた。

「僕は3組の北山さんかな。目も大きいし、すじくьюートだと思うんだ。」

サイトは詠進先輩の意外な返しに思わず飲んでいたスプライトを噴出した。あんた、キューって・・・ゼーゼーと、息を切らしてい

るサイト

に三上先輩は同じ質問をぶつけてきた。好きな女の子か、サイトは今日出会つた雨宮という女の子のこと思い出した。少ししか会話出来なかつたけどいい子だつたな。サイトはみんなの顔を見渡すと恥ずかしそうに言つた。

「いや、その、好きな女の子って言われても、すぐに浮かびませんけど……でも今日あつた女の子とかいい感じだと思いました。」

今日あつた女の子と聞いて三上先輩が「ええ？」とサイトの顔を覗き込んだ。いけね。焦つて余計な事言つちました。明日も描く予定の雨宮家にこの先輩がやつてきたら面倒だ。サイトが動搖していると三上先輩の浴衣の携帯電話が鳴つた。サイトがほつとしていると

三上先輩が携帯のメールをみながら、

「アイツ、とうとう腹くくりやがつたか」と言つた。

なんの事だろ？サイトが隣でニシワラ・エレクトロニクスとかいう、つまらないお笑い芸人のネタをテレビでみていた大和の袖をちよいちよいと突付くと大和はそれに気付かずふふん、とステージ上で転げ回るニシワラを見ながら笑つていた。

三上先輩はおもむろに立ち上るとみんなに聞こえるように言つた。

「みんな、いまから海岸沿いの波止場までいくぞ。たぶん、すげえ面白いものが見られると思う。」

そういうと先輩2人は上にシャツを羽織り、外出する準備をした。サイトもテレビにかじりついている大和の頭をはたき、一緒にいく準備をした。面白いものとはなんだろ？サイトは暗い夜道を懷中電灯で照らしながら歩く先輩2人の後を歩いていった。

しばらくして波止場に着くと三上先輩が「」で待つてよいかといつてサイト達4人は物陰に隠れた。

これからなにが起きるんだろう。すこしへキドキしてきた。

少し待つていると横断歩道を早足で横切る人影が見えた。対向車のランプがそれを照らすと、ジエルで髪型をばっちりきめ、緑色のスイツ

の襟を立てた大清水先輩が現れた。普段とはあまりにも違う気の入り方にサイトは思わずぶつと噴出した。となりにいた大和が

笑っちゃわるいよ。とサイトに注意した。あんなにバッヂリとした格好をして何をするつもりなのだろうか。波止場のベンチの前まで歩いた大清水先輩は落ち着き無くきょろきょろと辺りを見渡し始めた。ときおり大清水先輩が拳げる「・・・ッヒ・・・ッヒ」という

不気味な声が夜道に響く以外は何の音もしなくなつた。一同が一動を見つめていると反対側からコンビニの袋をぶら下げたノマ部長が歩いてきた。あーこれはもしかして…ようやくこのイベントがなんのかをサイトが悟ると大清水先輩はノマ部長に向かって

素っ頓狂な声を挙げた。

「ノマー好きなんだ！」

「『めんなさい！無理！ぜえーたいに、無理！もう私に話しかけないで！バイバイ！』

大清水先輩が言い終わる前にノマ部長が叫ぶとそのままダッシュでサイト達が隠れている前を横切り、「ひまわり」の方へ走つていった。

詠進先輩が呆然と立ち尽くしている大清水先輩を見ながら行つた。

「なんか・・・青春つて・・・悲しい色だね・・・」

それを聞いた3人がうんうん、と頷いた。しばらく夜風にあたつていたから体が冷えてきた。もう一回風呂に入り直そうかな。

サイトは後ろを振り返ることなく「ひまわり」に続く坂道をのぼつて今日はゆっくり休むことにした。

青春って・・・（後書き）

作者はスプライトが炭酸飲料で2番目に好きです（1位はジンジャー・エール）。ニシワラ・エレクトロニクスは江頭2・50のような芸人だと思って読んでください。もう出でこないと思いますが＾＾；

まーこかとーく(前書き)

息抜き回です。

次の日の朝、サイトが洗面所で顔を洗っていると右隣に条一郎が眠たそうに皿をこすりながらやつてきた。

「昨日、なんか知らないけど大清水先輩がずっとすすり泣いてよ。全然眠れなかつたんだ。」

サイトは昨日の波止場でのイベントを思い出して少しだけ可笑しくなりふふん、と鼻で笑つた。あの大清水とかいう先輩、いつからノマ部長のことが好きだつたんだり。そしてこれからやりやつして美術部員としてやつていくんだろ。サイトがぼんやりと

顔をタオルで拭きながら左隣で歯を磨いていた神崎に聞いた。

「ねえ、ともちやん。いま好きな女の子つている？」

サイトの問いかけに神崎は口から歯磨き粉を噴出した。条一郎がおい、おまえそんなシコミが…とおののいた。別に神崎に告白するわけじゃないって。サイトがぼやくよつていた。

「俺らもさー、高校生活始まつてもう4ヶ月田じやん? いくら文化部とはいひとつくらいカノジョが出来たやつが出てきても

おかしくないと思つんだ。男だけでつるんでるのも楽しいけどその、なんつうか、もてあますじやん、欲求を。」

サイトが言わんとする」ことを一条が理解し、にやりと笑った。神崎も口をゆすぎながらそんなモノかね、と言った。

「その欲求を絵を描くエネルギーに替えるんだ。そうすれば僕達1年生だつて全国大会にいける。」

後ろの方から松野の声がした。お前は根っからのアーティストだと、サイトが冷やかすと神崎も無言でうなづいた。トイレから出てきた

大和がそろそろ朝ご飯ができる時間だ。と言つたので1年生部員達は食堂へ向かつた。今日は午前中は大路地先生のクロッキー講座があるらしい。そして午後は再び外での写生があるので、今日も雨宮さんの家を描かせてもらおう、とサイトは思つていた。

雨宮といつ子は出来たらその絵を見せて欲しいと言つていた。彼女ももしかしたら美術部員なのだろうか。昨日は少ししか話せなかつたけど今日はもつと話が出来たらいいな。そんなことを考えながらサイトは朝食の玉子焼きを口に運んだ。

大路地先生のクロッキー講座

部員達は朝食をとり終わると、今日は大路地先生がクロッキーを教えてくれるというので宿泊施設「ひまわり」の会議室へそろそろと移動した。やはりノマ部長は大清水先輩と少し距離を置いているようだつた。会話はあるか、ノマ部長は大清水先輩の方すら向こうとしなかつた。サイトは昨日とはまったく違つて意氣消沈しきつた大清水先輩の顔を見て少しかわいそうになつたが、合宿という空氣に飲まれて勢いで相手の気持ちも確認せず告白したコイツが悪いのだ、と思つようとした。

部員達が会議室に入るとテーブルの周りにイスが12個並べてあり、テーブルの前でカゴに入った果物をセットしている大路地先生がこつちを見てにこりとしたが、表情を切り替え部員達全員に聞こえるように言った。

「みなさんおはよう。合宿だからって気が抜けてる生徒が何人かいるよね。そんなことじゃ今年も全道大会までいけないわよ。ノマちゃん！」

大路地先生がいきなり大きな声でノマ部長を名指しで叱りつけたので部員達に緊張が走つた。そうだ。俺達は函館までピクニックに来たわけじゃない。夏の大会で勝ち進んで全国大会に行くためにこの合宿に来たんだ。部員達がこの合宿の意味を再確認するとノマ部長が

みんなを代表して言つた。

「大路地先生、たしかに気が抜けていた部分がありました。今日は私達にクロッキーを教えてもらえないでしょつか。よろしくお願ひします。」

他の部員達もお願いします！と言い、頭を下げた。その様子を見て大路地先生が口を開いた。

「そうよ。今回のクロッキーで一番必要なものは集中力よ。みんなさんが気持ちを入れ替えて真摯な気持ちで絵に向き合えればきっと

素晴らしい絵が出来上がるはず。その気持ちで頑張つてちょうだい。

」

先生の言葉を聞いてみんな、はい！わかりました！と大きな声で答えた。すると大路地先生は部員ひとりひとりに座る席を指定した。席は

11人の部員と先生を合わせた12席があり、サイトは時計で囁うところの「2時」の位置の席に座るように言われた。部屋に入るとき

先生がいじつていた丸テーブルの上をチラシと見て、今日はこの力ゴと果物を描くのか、とサイトは思った。

「足元に気をつけて！今日使つ画材が置いてあるから。」

サイトが声に反応してえ、と振り返るとつま先に紙コップのようなものがあたり、中から墨のような液体がこぼれ出して近くにあつた

画用紙の上に点々と色がついた。やべえ。サイトは急いで紙「コラップ」をひりい上げ、墨が零れた床をテッシュでふき取った。

「3時」の位置に座つた舞先輩が言った。

「サイト君。墨は補充してもらえないから、そのつもりで。今回は少し気合をいれないとマズいみたいね。」

いつもおちやらけている舞先輩が口を真一文字に結んでいた。サイトは紙「コラップ」の中を確認した。

コラップの中には全体の三分の一くらいしか墨が残っていない。やばい、どうある? この量での絵が描き切れるだらうか? それに画用紙にさわつけた墨が付いている。サイトはまだ始まつてもいいなこの辺のクロッキー講座において窮地に立たされていた。

大路地先生のクロッキー講座（後書き）

いきなりスリリングな展開になってきました。短時間で絵を描くには集中力が大事、集中力のない作者にとっては耳の痛い言葉です^;

サイト、大ピンチ！

大路地先生が「12時」の席に座ると部員達全員の顔を見渡していった。

「こまからテーブルの上の静物画をみなさんと一緒にクロッキー（素描）していきます。時間は、そうね、いま8時半だから9時まで。

それじゃあ、始めるわよ。」

「ちよつ、ちよつと、待ってください。」

神崎が慌てて席を立ち上がって言つた。

「いまから始めるクロッキーのはこの墨と割り箸の片側だけを使って描かないダメなんですか？クロッキーをネットで調べたら鉛筆で人物を書くものだつて言われてたんですが、」

「とにかく9時まで絵を描いてちょうだい。話はそれからよ。」

大路地先生が威嚇するように神崎に言つたため、神崎は納得がいかないような顔をしながら席に座つた。サイトは足元に置き直した

墨の入つた紙コップと割り箸の片方一本を見つめた。この割り箸に墨をつけて画用紙に絵を描くのか。大路地先生がはじめ、と声を

かけてテーブルの上の果物の素描会が始まつた。サイトは画用紙の左端から真ん中にいたるまで付着している黒い点を睨みながら墨を

付けた割り箸を画用紙と上に置いた。ん、なんだこれ。筆と違つて全然紙に色が付かないぞ。慌てて他の部員達を見渡すと他の1年生

部員

達もサイトと同じく苦戦しているようだつた。条一郎にいたつては開始5分だと「お手上げ」というような態度を見せている。サイトは隣で絵を描いている大路地先生の動きを確認した。割り箸を絵の対象の果物に向けて画用紙との距離間をはかり、割り箸の角を使つてすいすいと画用紙の上を黒い線が走つていく。そうか、こうやって絵を描くのか。サイトは見よつ見まねで割り箸の角を使い力「ゴ」に乗つたりんごの輪郭を取ろうとした、が、線が太くなつたり、細くなつたりして安定した色が出せない。やばいやばい、

時計を見るとあと10分しかない。サイトの頬に汗がつたつた。部員達は思い思いに中央のテーブルの上の果物を描いていった。

大路地先生のポケットにあつたストップウォッチが鳴り、「はい、やめ！」と先生の号令がかかると部員達はみんなふうーと息を吐き出した。

「いまからみんなが描いた絵を見せ合つて、ビンを良くしたらい絵になるか話し合つてちょうどだい。10分後にまた新しい画用紙で再開するわよ。」

先生がそいつたため、ノマ部長の号令で部員達はテーブルの周り

に集まつて30分で描いた絵を提出し始めた。

やはり3年生の絵は過去2年間の経験があるからか、割り箸の角や中央を使ってうまく果物の輪郭やカゴの全体像をとらえていた。

詠進先輩の絵にいたつてはちゃんと果物に陰影までついていた。1年生でも松野や大和の絵はうまく特徴を掴んだ絵を描いていた。

大和がサイトが描いた絵をみよつとすると、サイトは画用紙を後ろで手を組むように隠した。神崎は今回は割り箸と墨の使い方に戸惑いあまり上手く線が引けていなかつた。条一郎も同じような問題を抱えているような絵だつた。

サイトの絵はといつて、最悪だつた。

全体的に絵の対象をとらえきれていない上に時間がなくて焦つてしまつた為、子供が描いたようなぐけやぐけやな絵になつてしまつた。最初に墨をこぼしてやる氣をそがれてしまつたと言つて訳してもこれはとても人に見せられるレベルではない、と思つた。

空氣を読まずに三上先輩が「サイト君の絵、見せてよ」と言つて来たのでサイトは慌ててこの場を逃げ切る理由を考え始めた。

「ちょっと、俺、トイレにいってきます」とサイトが言おつとすると後ろの方に座っていた大路地先生が言つた。

「サイト君。あなたには今回のクロッキーは少し難しそうだみたいね。次はみんなが描いているのを観察してなさい。それじゃみなさ

ん、画用紙を配るわよ。」

サイトは先生に自分の絵が見られていた事を知ると頭が真っ白になつた。俺だけ次は見学かよ。サイトはすこし惨めな気持ちになつた。画用紙を他の部員に配り終わると大路地先生はストップウォッチを持ち

「次は10時までね。はじめ！」と号令をかけた。

今から1時間近く見学するのかよ。サイトは湧き出でてくるマイナスの感情を抑えながらイスに深く座り込んだ。

サイト、大ピンチ！（後書き）

実際のクロツキーとは少し異なります。作者が学生時代に経験した「制限のある状況」でのクロツキー教室を書きたかったのでこういう形になりました。おかげで「集中力」はついた・・・と思います（笑）

再び黒板へ（前書き）

大路地先生のクロツキー講座が終わりました。

再び宿舎へ

正午過ぎ、サイトは昨日と同じように水彩画セツトを右手に持ち、函館の住宅街をふらふらと歩いていた。

大路地先生のクロッキー講座は11時半くらいまで続き、その後サイトはみんなに餌食に誘われたがとてもみんなと一緒にパン飯を食べる氣

にはなれなかつた。そのくらい自分の実力のなさを大路地先生から思い知らされた。

太陽がちょうど頭の上で輝きだし、気温がぐんぐん上昇している。北海道の夏とは言え、今日は真夏日になるだろう。外で絵を描くのには

あまりいいコンディションではないが汗をかく事でネガティブな気持ちをすこしは流せるだろ、そんな風に前向きにサイトは考える事にした。

サイトは住宅街のはずれにある洋風の雨宮家を視界に捉えた。昨日はこの家の外観を描かせてもらつたがつまく構図を取ることができなかつた。

サイトは水彩画セツトから水を入れる容器を取り出し玄関先の蛇口から水を注いだ。いけね、家の人にこの家を描く許可をもらわなきや。

「ほん、と咳払いをして深呼吸をしたあと、インターホンを鳴らす

とじばりへしては」、と女人の声がした。

「すいません、昨日この家を描かせてもらった者ですけど今日も描かせてもらつても大丈夫でしょうか？」

サイトが早口で言つと、家中からくす、と笑い声がしたような気がした。「大丈夫、構わない」と透き通つた声でマンガのセリフのようだ

言葉を聞くとサイトは少しだけ安心した。インターホンで話したのは昨日会つた雨宮慈雨。

「あ、ありがとうございます。それでは外で描かせてもらいます。
どうも！」

誰もいないインターの前でおじぎをすると水の入つた容器を持ち、向かいの駐車場の砂利の上にマットを引き、雨宮家が一番良く見える

場所を探してうらうらと歩き回つた。しかるべくポイントを見つけるとそここの場所までマットを動かし、その上にサイトは腰を下ろした。

無理に家全体を絵の中に入れる必要はない。この家で一番描きたいポイントは三角頭のエントツだ。その上に流れの雲を描こう。

今日描く絵の構図は決まった。サイトが鉛筆で画用紙に下書きをしていると家中から制服姿の雨宮慈雨が出てきた。突然の出来事にふつと

サイトは立ち上がったが、リリは雨宮の家の奥の住人が出でてくるのは当然のことだ。サイトは雨宮にぺこりと頭を下げた後、

「リ、リさんちがー。今日も学校?」となるべく氣をへな感じで話かけた。すこでも距離を埋めたいと想つたからだ。

慈雨はふつ、と笑つと、「うん、これから部活」とここサイトの方へ近づいてきた。そのまま駐車場に入りサイトの横まで歩くとサイトが絵を描いていた画用紙を覗き込んだ。やわらかい雨宮の匂いにつつとつしゃつになつたが、「ま、まだ描きかけなんで見ないで」と言つて、サイトは持つていた絵を胸中に纏した。雨宮ちゃんは再び笑みを作ると「やつ、すこし残念」とつて踵を返してそのまま駐車場を出よつとした。サイトは何か言葉を掛けよつとしたがいい言葉が浮かばなかつた。頭をかりかりとかき始めると雨宮の後姿が遠くなつていいく。

まづこ。リのままだと描いた絵をあの手に見せられなくなる。地元から函館は結構遠いし、わざわざ会こつてみるほど仲もまだ良くなつてすこ。リのままだと描いた絵をあの手に見せられなくなる。地元どうすればいいんだる。サイトはその場に立ちすくんでいたが自分の本来の仕事を思い出し、顔をぱみと、と呂とマシトの所まで戻り再び絵を描き始めた。でも雨宮のことが脳裏をよぎつてなかなか筆が進まなかつた。しばらくすると女子高生らしき女子が田の前の家に入りひとしてこるのが見えた。筆を横の容器の水につけていたサイトが振り向くとそこには雨宮慈雨がいた。

「あれ？学校は？」

「サイトが聞くと雨宮が

「ちよっと、忘れ物」

と恥ずかしそうに答へ、家の中に消えていった。忘れ物か。しつかりしてそうに見えて意外にぬけた所があるんだな。

そんなことを思つているとドアが開き大きめのスケッチブックを持った雨宮が出てきた。やっぱり彼女も美術部員だったのか。

「あ、雨宮さんも美術部員なんだ？お、おれもおんなじ美術部員」

「知つてる。昨日聞いたから。今度の全道大会、函館で開催だからその時に会おう」

雨宮さんの意外なきりかえに少し驚いたが一か八か、サイトは勇気を振り絞つて聞いてみた。

「あ、あのそ、出来上がったらこの絵を見せたいからそ、よかつたらアドレス交換してくれない？」

すこし強引な形かもしれない。雨宮さんは振り返ると少し恥ずかしそうにスカートのポケットから携帯電話を取り出した。

これでサイトは雨宮さんと絵を見せる約束をとつたことが出来たと同時に、他の学校の美術部員と接点を持つことが出来た。

彼女に名前のつづりを確認するとサイトの携帯には新しく「雨宮慈雨」が登録された。慈雨もサイトに名前のつづりを聞くと

彼女の携帯に「斎藤才斗」が登録された。彼女はなにかに気付いた
ように含み笑いを始めた。サイトが聞くとこう言つた。

「私は、さくらのことを、よく思ってます。」

いきなり呼び捨てにされたので面食らつたが

「慈雨でいいよ」

「じゃ、じゃあ慈雨、絵が出来たら必ず連絡するから」

そんなやりとりをした後、慈雨が部活に遅刻しそうだと言つたので別れの挨拶をし、サイトは彼女の姿を見送つた。

三度マットの上に腰をおろすとなんだか知らない疲れがどつと押し寄せてきた。部活以外で女の子とアドレス交換をするのは中学以来だ。

それでも繰り返し系の名前つてどういふことだら?まあどうあえずこの絵を完成させなくちゃな。

サイトは火照った体を冷やすように薄青色の絵の具を家の上の背景に塗り重ねていった。

再び権利係へ（後書き）

なんか作者も学生時代を思って出して少し恥ずかしくなつました（笑）

合宿終わる（前書き）

今回で合宿が終わります。

夕方五時過ぎ、部員達が「ひまわり」の代表に「ありがとうございます」と頭を下げる。大島先生がレンタルし直したハイエースに乗り込んで函館を出発した。目的地まで大体30分。夏休みのため渋滞が続くだろう。部員達はさすがに疲れた様子を見せ、神崎と条一郎が

眠ってしまおうとする松野にイタズラをしかけていた。サイトの隣に座った大和がサイトの顔を覗き込むと言つた。

「サイト、やつきからなんか、ニヤニヤしてんけど……なんかあつた？」

大和に言わるとサイトはビクッと反応し、「別になんでもねえよ」と言い、荷物の中からPSAを取り出した。女の子とアドレスを交換して浮かれてます、なんてバレたらみんなに馬鹿にされるだろうが。後ろの方で「うおお、やっぱ詠進の絵はうめえーな」と三上先輩の声が

した。振り返ると詠進先輩が昨日、今日描いた「チャーミーグリーンの坂」の絵をみんなに見せていた。サイトがPSAをリュックに戻し

「俺にもみせてください」と言い、スケッチブックを三上先輩からうけとるとそこには鉛筆で描かれた風景画が描かれていた。

坂道を頂上から描き、坂の下には海が広がるその絵は細かな線とたくましい実線が混在した「絵がうまいオーラ」が漂う空気感を醸し出していた。

本当はもっと適切な評価をしたいのだがみんな炎天下での「[与]生会に疲れており、「いやー、ここ街灯のタツチが」とか「雲の描き方が秀逸」

など抽象的な褒め方をしていた。それにも関わらずその絵を描いた詠進先輩は「みんなありがと」って笑みを浮かべた。

あたりが暗くなるころ大島先生が運転するハイエースは出発点と同じ恵港に到着した。なんども睡眠を妨害され機嫌斜めな松野を始め部員達が車から降りると大島先生が部員達を集め、この合宿を締めくくるように言った。

「みんな合宿で自分の能力を再確認できた?ダメだった人はそれを明日から始まる夏の大会に生かして頑張ってちょうだい。

それじゃノマけやん何かある?」

話を振られ、ノマ部長はしばらく考えたが「特にありません」と答えた。なにもないのかよ。

その後、部員達は解散し、みんな各自に帰宅の路に着いた。サイトは家のベッドの上で携帯電話を眺めていた。家の絵は完成したけどどうやってそれを慈雨に見せればいいのか。しばらく考えた後、サ

イトは画用紙を鏡の前に立て、携帯のカメラ機能でその絵を撮影した。

それをメールに添付し、「斎藤才斗です」というメールタイトルをつけ

「今日描いた絵です。これからよろしくお願ひします」という本文を書き、「雨宮慈雨」にメールを送信した。ちょっと力たい文章だったかな？

まあいい。今日は疲れたから寝よう。サイトはベッドのなかに入り明日から始まる夏の大会に向け英気を養う事にした。

合宿終わる（後書き）

突然ですが、作者の都合でしばらく休載します。できるだけ早く戻つてきます。期待して待つてください。

反省会～（前書き）

おひやしづりです。気が向いたので少し更新してみます。完走できるよう頑張ります^_^

反省会？

次の日、サイトが美術部の部室のドアを開けると冷ややかな風が사이트の首筋を撫でていった。そつか、俺達が合宿に行っている間に大路地先生がクーラーをつけてくれたんだっけ。サイトはドアの正面に設置されたクーラーを見つめるとありがとう、とこう意味でペリ

と頭を下げた。その様子を見て、先に部室に来ていた松野が声を掛けた。

「おはようサイト。昨日描いた絵、持つてきた？」

松野に言われサイトは挨拶を返すと「うめん、持つてくるの忘れた」と頭をかきながら答えた。松野のとなりにいた神崎が

椅子からずり落ちるよつにして笑つ。

「せつかく合宿で絵を描いたんだからみんなで見せ合おうと思つてたんだよ。昨日はみんな疲れてたし、時間も無かつたからさ。まつんは何の絵を描いたんだっけ？」

神崎に聞かれ松野は待つてました、と言わんばかりにじい血漫のスケッチブックを取り出した。意気揚々とページをめくろつとすると「みんな、おはよー」という明るい声と共にノマ部長が教室に入ってきた。「おおーーすすしーー」部長が夏服のすそをぱたぱたとさせると

松野は咳払いをし、「おはよ〜」とやります。部長。」と顔を赤くして挨拶をした。サイトと神崎も部長に挨拶をすると後ろから大和と条一郎も

教室に入ってきた。「あれ? 部長と一緒に来たの?」神崎が聞くと二人は笑みを浮かべながらうつむいた。

「もうーーずっと私の後ろつけて歩いてきたの? 声掛けたらいいじゃない!」ノマ部長がわめくと「しょーがないじゃない。ウブなんだから」

と言いながら舞先輩が教室に入ってきたのでサイトはすこし可笑しくなった。カバンを机の上に置くとノマ部長が話を切り出した。

「みんな、夏の大会なにで絵を描くか決めた?」

サイトが聞き直すと「油絵と水彩画、どっちで描くか、ってこと。キャンバスの木枠を用意するから油絵を描く人は先に教えてよね。」

ノマ部長が言い終わると松野が「はい! 僕は油絵で描こうと思います!」と拳手をして答えた。やる気満々の松野を見て舞先輩がふつと笑うと「私も油絵で描く」と手をぶらぶらさせて答えた。条一郎が少し考え込んだ様子を見せると「おれは... 水彩画で... お願いします」

と大和がちいさな声で言った。神崎も「おれも今回は水彩画にしよーかなー」とつぶやいた。サイトは持ってきた油絵セットをじん、と

机に投げ出すと「斎藤サイト、油絵でお願いします！」と明るくはつきりとした声で部長に答えた。それを聞いて条一郎も「俺も油絵で」

と消え入りそうな声をあげると部長は「わかつた。明日までに用意しておくな。」とメモを取りながら言った。夏の大会の油絵のサイズの

最大の大きさは20号と決められており、部員達はこの間発表会で松野が描いた絵よりすこしさいサイズの大きさのキャンバスで絵を描くことになりそうだった。

俺にあの大きさの絵が描けるだらうか。サイトの胸に不安と期待が広がった。部長の話が終わると神崎が思い出したように手を叩いた。

「あ、そうだ。まつんに絵を見せてもらひうんだった。やまちゃんと条一郎、昨日描いた絵、持つてきた？」

そう言わると二人はカバンから昨日までの合宿で描いた絵を取り出した。松野は教壇に上るとスケッチブックを教卓の上に広げた。

部員達は松野が描いた絵を覗き込んだ。

アナログとデジタル（前書き）

ひゅうです。美術部でした。

アナログとデジタル

松野の絵は山の中腹から函館の市内を見下ろした風景を描いていた。濃い鉛筆で下書きされた線の上に独特の重い色が乗っている。

水彩画だというのに軽やかな描写は見られず、おそらくこういった風景画には使われないであろう緑や赤茶系の大気に覆われた風が函館の

街を落ち着いた配色に納めていた。サイドがおおう、と感嘆の声をあげると神崎が「なんか、昼間に描いたのに夜の絵みたい」と冷やかした。

松野が不機嫌そうにふい、と顔を背けると「今回も松野ワールド全開の絵だね！」と舞先輩が笑みを浮かべて言った。気を良くなした松野は

「この調子で大会も頑張りますよ！」と鼻息を荒くして左手を握り締めた。次に神崎と大和が同じ場所で描いた教会の絵をみんなに発表した。

2人とも絵に色がついていないデッサンだったが教会の形を捉えたバランスのいい絵に仕上がっていた。二つの絵を見比べていた松野が呟いた。

「うーん、やっぱり大和と比べると神崎の絵は荒さが目立つんだよなあ。」

それを聞いて神崎が頭を抱える。「うるせえー悪かったな。そりや

大和は中学の時から美術部だったんだから俺なんかより上手いに決まってるよ！」

次！条一郎！早く見せて。」

神崎がスネるようすに条一郎を促すと条一郎はおそるおそる画用紙を体の前に出した。画用紙には赤い建物が描かれている。

「赤レンガ倉庫を描いたんだけど、観光客に見られたり声を掛けられたりしてあんまり集中して描けなかつたんだ。それにレンガの特徴を

掴むのが難しくてなんか、こんな感じの絵になつちました。」

部員達が覗き込むと赤いレンガの倉庫は赤と茶色が妙なバランスで混じつた見る人に不安を抱かせるような仕上がりになつていた。ノマ部長が口を開く。

「絵を描く時は集中力が大事、つて大路地先生も言つてたよね？やっぱりある程度自分の世界にこもつて真剣に描かなきゃダメだよ」

先輩の少しキツめのアドバイスを受けて条一郎は申し訳なさげにつむいた。条一郎は高校生になつてこの美術部に入るまでは真剣に絵を

描いたことがない。同じ境遇のサイトが重くなつた空気を変えるよう声をあげた。

「あ、そうだ俺、昨日描いた絵、携帯で撮影してたんだ。ちょっとサイズちいさいけど見せるよ。」

そういうながらサイトがポケットから携帯電話を取り出すとバイブ

機能が作動し、メールが届いた。メールの送り主は雨宮慈雨だ。

サイトは何の意識もなくメールを開いた。

「サイトへメールありがと。構図の取り方がすげく良くて素敵だと思つ。私も自分の絵、送るね」

添付されたファイルを開くとアニメのような等身の女の子がサイケデリックな風景の中で片目を閉じて微笑む絵が描かれていた。

ん？サイトが状況を飲み込めないでいると「これ……パソコンを使つて描いた絵じゃない……？」と後ろから携帯を覗き込んだ大和が呟いた。

「ほんとだ。サイサイ、こんなシコリあるなんて少し意外～」ノマ部長の声を聞いてサイトが我に戻ると一気に焦りが噴出してきた。

「ち、ちがうんですけどー」の絵は俺の絵じやなくて！ええっとーなんて言えばいいんだろ……」

サイトが大きく頭を搔きながら弁解しようと舞先輩が女の匂いを嗅ぎ取つたのか田配せをしながら色々口に声を使う。

「サイト君～。どうこうとかちゃんと説明しなさいよね～誤魔化したりしたらお・し・お・きじやうわよ。」

ああ、こつなつた以上、仕方が無い。サイトは合宿で雨宮慈雨といふ函館の美術部員と出合つたこと、その子の家を描かせて貰つた事、

その子と連絡先を交換したことを先輩に伝えた。サイトの話を聞く

と「サイト、お前、やる時はやる男なんだな・・・」と一条一郎が曰を輝かせた。

大和と神崎が驚いたように顔を見合わせている。写真の絵を覗き込んだ松野が納得できないような口調で言い放った。

「確かに上手い絵だけど、パソコンで絵を描くなんて少し軽蔑しちゃうなー。パソコンで自動で色を塗つたり拡大したりできるんだろ?」

それは楽して絵を描いてるって事だらうし、純粹に美術とは言えないんじゃないかな。」

サイトがむつとして言い返した。

「まつりん、WEBデザイナーって仕事知らないのかよ。今はこうやってパソコンで絵を描いてネットで発表するのが流行りなんだよ。」

サイトの様子を見て舞先輩が子供を見るような目で笑った。慈雨がこうじう絵を描いてるなんて意外だつたな。サイトは自分が描いた絵の

事を忘れ、デジタル技術で描いた慈雨の絵を否定する松野と言い争いを繰り広げていた。

「やつぱりや、自分の力で描いて初めて自分の絵って言えるわけじゃない。それを機械にやつしてもいつのまは僕は違うんだよな。」

「だから、いつも描き方もある、って言つてるだけじゃん！自分の価値観を人に押し付けんなよ！」

サイトが松野に対して声を荒げた。会話の話題になつてるのは雨宮慈雨の絵についてだ。パソコンを使って描かれたその絵は手で描かれた

絵と違い、アニメのようなポップな雰囲気をデジタルの色彩から発していた。2人のやりとりを見ていた神崎が大和に聞く。

「なあ、やまちやん。パソコンで絵、描いたことある？」

「うーん……俺も家のパソコンに画像編集ツール入れてるけど……ああいう絵つて……大会に出せるのかな……」

大和が考え込むとノマ部長が下唇に指を付き立てて話す。

「やつぱり深夜アニメとかの影響で大会でもあーいうイラストみたいな絵は増えてくるよね。でもやつぱり票は入らないみたい。投票するベテランの先生達からはなかなか認めてもらうのは難しいと思つよー。」

ノマ部長の話を聞いて松野がふふん、と鼻を鳴らしてサイトに言つ。

「ほら、部長だってそういうてるじゃん。僕たちが描いてるのはマングやイラストじゃなくて『美術』なんだから。いくら見栄えが良くてパソコンで描いた絵じゃ全国には行けないよ。」

サイトは唇をかみ締めた。慈雨、お前はどうこう気持ちでこの絵を描いたんだよ。すぐにでもメールして問い合わせたかった。

付き合いが浅く、彼女の絵を擁護してあげられなかつたのが悔しかつた。「お、みんな来てるじゃん」三上先輩がドアから教室に入ってきた。

うつむいているサイトに「なにがあつた?」と聞くとサイトは「いえ、別になんでもないです」と答えながら携帯をポケットにしまつた。

三上先輩が部員達みんなに聞こえるように言った。

「残念な知らせが2つある。大清水のやつ、部活辞めるつて。」

えつ、部員達に動搖が走る。顔をしかめるノマ部長を見てサイトは会宿での出来事を思い出した。やつぱり立ち向かえなかつたんだな。舞先輩が呆れながら「この時期に何考えてるんだろうね。」とせせら笑うように言った。あの先輩、ノマ部長の事、どれくらい好きだつたんだろう。

サイトが大清水の感情を読み取つとすると信じられない一報が三上先輩の口から発表された。

「それともう一つ、詠進、今回の大会、出場辞退するつて。」「え

「…？」ビリビリと音を立てる。

サイトが三上先輩に食つて掛かるのを一条一郎が止める。他の部員達もびっくりしたように声をあげる。

「詠進のやつ、函館の大学にほとんど内定が決まってたんだけど他の大学受験するんだって。今日聞いたばかりだから俺もよくわかんないよ。」

自分に絵の楽しさを教えてくれた詠進先輩が出場辞退？サイトの頭の周りをたくさんの疑問符が回る。どうして？なんで？倒れるように

机に手を掛けると言葉を振り絞った。「俺、そんなの、信じられません。だって詠進先輩は去年も全国大会に出てるんでしょ？その人が絵を描かないなんておかしいじゃないですか！」

部室をしばし沈黙が包み込む。ノマ部長がサイトを諭すように言った。

「たぶん今より偏差値の高い大学へ行こうとしてるんだから勉強しないやならないんだよ。仕方ないよ。私達だけで頑張ろう？」

ノマ部長が呼びかけると「そうだよ、サイト、先輩の分まで頑張ろうよ」と松野がサイトの肩を叩く。でもサイトは納得が行かなかつた。

晴天の青空に暗い雲が立ち込め始めた。

寝る前に更新します。

「「」で、いいんだよな？」

「うん。先輩の言った場所だと「」だと思つんだけど。」

夕方、サイトと松野と大和の三人は詠進先輩に大会出場辞退の詳細を聞くために部長から教えてもらつた詠進先輩の家に行くことにした。

目の前には「パスタ屋 びあんこ」の看板が掛かつた洋食屋が建つている。「」の店かな」大和がサイトの後ろで言つ。

詠進先輩の家は地元で有名なパスタ屋であると事前に教えてもらつていた。サイトが重い木製のドアを開くとからんからん、と鈴の音が鳴る。

瞬間、店の奥にいたシェフと目が合つ。長い帽子を被つたその人物にサイトは話しかけた。

「すいません。しおさい高校の美術部の者ですが、詠進さん、いますか？」

サイトの問いかけにシェフは仕事の手を休めて言つた。

「詠進ならたぶん部屋にいると思うから。店の裏にインターホンがあるから、それを鳴らして呼んでやつてくれ」

それを聞くとサイトはありがと「」ました、と頭を下げる。再

びドアを開け外に出ると松野が「あの人、詠進先輩のお父さんなのかな」

と呴く。大和が「店と家は別になつてるんだ」と裏路地を歩きながらきょろきょろと目を動かす。

しばらくして言われたインターホンが見えてきた。サイトは一呼吸置くとそれを力強く押した。

「はい、今行くからちょっと待つてください。」

急ぎ足で階段から降りるどたどたという音が響く。ドアが開くと意外な訪問者達に詠進先輩は驚いた顔を見せた。いつもとは違う短パンとTシャツ

姿の詠進先輩を見てサイトが言つ。「詠進先輩、三上先輩から話を聞きました。」それを聞くと詠進先輩は

「ユージンのやつ、本当におしゃべりなんだから」と頭を搔いた。その様子を見てサイトは続けた。

「詠進先輩、どうして大会に出ないんですか？俺、先輩と出会つてから絵を描くつてことがすごく好きになつてきたり、先輩を目標にして絵を描いていきたいって思つてたんですよ。今からでも遅くない。大会に出てくださいよ、先輩！」

サイトの畳み込めるような話し方を聞いて詠進先輩は目を背けた。そして後ろを向くと呴くように答えた。

「僕、東京の大学に行くことに決めたんだ。」「えつ」サイトと松

野が聞き返す。正面を向き直すと先輩は続けた。

「サイト君、僕が学校の玄関で君に言つたこと、覚えてるかい？」

「ええ、覚えてます。」

サイトは始めて詠進先輩と出会つた時のことを思い出した。自分が感銘を受けた絵の作者は自分の絵を愛していない。

絵を描くだけでは食べていけない。そんなことを言われて頭にきたけどそれは先輩なりに美術の実態をリアルに教えてくれたのだった。

「僕、本当は絵が大好きなんだ」

詠進先輩の言葉が3人の胸に響く。

「僕は東京の美術大学に行つて本格的に絵を勉強して画家になろうと思つてるんだ。学校に入学するためには一生懸命勉強して、大好きな絵を描くのを我慢して大学に行こうつて決めたんだ。そのために今回の大会を辞退するのは・・・うーん、仕方ないって言葉は使いたくないな。」

先輩は必死に「仕方ない」に代わる言葉を探している様だった。見かねたように松野が言つ。

「詠進先輩が本当に絵が好きなんだっていうのは普段の行動を見ても分かりますよ。今回の大会は任せください！先輩の分まで全国で観光しておいしい物でも食べてきますよー！」

松野の力強い言葉を聞いて詠進先輩は「そうかい。期待してるよ。」と笑みを浮かべた。サイトは決心したように息を吸い込んだ後先輩

に言った。

「先輩の気持ちはよく伝わりました。画家になるために他の事を努力するのは大事なことですもんね。先輩がいないのは残念だけど俺達でなんとかしあさい高校美術部のメンツは建てておきます。」

サイトが言い終わると詠進先輩はサイトの両肩に手を置き、瞳を覗き込んで言った。

「サイト君、君の長所は絵の構図の取り方の上手さとセンスの良さだ。全国区となるとデッサンが上手い人、色彩感覚が飛びぬけてる人がたくさんいる。でもその人達に引け目をとることは無いんだ。君は君の好きなように絵を描けばいい。誰にも遠慮せず誰よりも自由な絵を描いて欲しい。これが先輩として僕が言えることの全てだ。頑張つて。」

先輩のいう事を聞いてサイトの目に涙が浮かんだ。自分が尊敬してゐる先輩がこんなにも自分を期待しているなんて。サイトは目を拭つります！」

「先輩、こんな遅くにありがとうございますーそれじゃ、そろそろ帰りますね。明日から本格的に絵を描き始めるんでよろしくお願ひします！」

と先輩に別れのあいさつをした。大和と松野の手前、おいおいと泣く訳にはいかないからだ。サイトの気持ちを汲み取ると詠進は笑みを浮かべた。

「みんな、心配かけてすまなかつたね。僕も自分の気持ちをみんなに言えてスッキリしたよ。僕もセンター試験にむけて勉強するからみんなも頑張つて絵を完成させて見せてよ。それじゃ、今日はおや

すみ。」

先輩と別れのあいさつをすると三人は帰宅の路についた。自転車を押しながら大和が「蚊に刺された・・・家中に入ってくれても良かったのに・・・」

と呟く。「突然来たんだから仕方ないよ。彼女が来てたのかかもしれないし。」「変なこというなよ。勉強、一生懸命頑張るって言つてたじやねえか。」

そんなことを話しながら三人は夏の大会に向けての絵の構想を膨らませた。絵の作成期間は夏休み明けの始業式の日まで。分かれ道でサイトは気持ちを抑えきれずに夜道を駆け出し始めた。

本心（後書き）

作者は大学を受験しなかつたので受験勉強の時期だとかが実際の高校と異なっている部分があるかもしれません^_^；もう寝ます。

シサックのおんなたち

次の日の朝、サイトは美術室へ向かう階段を意気揚々と駆け上がっていた。昨日決心したように詠進先輩の分まで頑張つて良い絵を描かないとな。

サイトが勢いよく教室のドアを開けると中で条一郎と舞先輩が手をつなぐように抱き合つていた。サイトはぴしゃり、とドアを閉めた。

「ち、ちがう！ちがうんだ！」

条一郎が急いでサイトの元へ駆け寄つた。「キャンバスを張りうとしてたんだよ！」条一郎に押されてサイトが部室に入ると舞先輩が木枠

を抱えて条一郎を待つている。どうこういふと、サイトが聞くと条一郎が答えた。

「俺も初めてだからわかんないんだけどよ。一人がペンチで生地を引っ張つて、もう一人がその上を釘で止めるんだ。そうやって生地を木枠に貼り付けていくんだ。」

条一郎の説明を聞いてサイトはなんだ、抱き合つてたんじゃないんだ。と息を吐き出した。それを聞いて舞先輩が

「バカなこと言わないでよ。言つとくけどあたし、年下はノーマークだから。」と誰も聞いていないことまで答えてくれた。

サイトはイスに座り、一人の作業を眺めていた。条一郎がペンチで

生地を引っ張り、舞先輩がハンマーで釘を叩く。へえ、なんか日曜

大工

みたいだ。角を4ヶ所止めると舞先輩が「出来た！1年生は練習も兼ねて、自分達でやりなさいよね！」と生地を止めたキャンバスを抱えて言った。

そうか、この人は自分のキャンバスを後輩に手伝わせて作らせたのか。一仕事と終えて肩を回す条一郎と一緒にキャンバス作ろうか、とサイトは

呼びかけた。条一郎はうん、とうなづくと「引っ張る方と釘で打つ方、どっちがいい？」と聞いてきた。舞先輩がキャンバスになにか絵の具

のよつなものを塗りつけて言つ。

「引っ張る方はパワーがある人がやつたほうが弾力のある良いキャンバスに仕上がるわよ。そのためにわざわざ条一郎にやつてもらつたんだから。」

条一郎が苦笑する。そういう訳で条一郎がペンチで生地を引っ張る係、サイトが釘をハンマーで打つ係に決まった。条一郎が大きな木枠を取り出すと

「これも昨日、先輩と一緒に作つたんだ。作つたつて言つても4スミを止めただけだけどな」と説明してくれた。

サイトはありがとう、と言うと釘を3本口に加え、大工のように腕まくりをして条一郎が木枠を抑えてペンチで引っ張るのを待つた。

「おまかー。あーもつキャンバス張つてるんだー」

サイトがドアの方に手をやるとノマ部長が部室に入ってきた。部長に挨拶をするとサイトは釘をハンマーで思い切り打ちつけた。ガン！釘の頭が

横に曲がる。それを見て「へだなー。ちよつと私に貸してみ？」と部長が言つのでサイトは釘とハンマーを彼女に手渡した。するとノマ部長が纖細な手つきでとんとんと静かに、正確に釘を木枠に打ち付けて行つた。おおー、とサイトが歓声をあげると

「男の子なんだからこれぐらい出来なきゃもつないぞ」 とぶつりつ子のよつこ部長は答えた。角を止め終わると部長はキャンバスを抱えて言つた。

「でけたーこれあたしの分ね！ありがとね、タカジョー。」 条一郎がまたもや苦笑する。サイトは条一郎の肩に手を掛けて同情すると

今度こそ、と言わんばかりに自分達のキャンバスを作り始めた。

シヤクのおとなたち（後書き）

今回は書きかたを変えてみました。サイトのセリフがあまりません。
もひとつ寝ます。

大会ミーティング（前書き）

連載再開してから少しづつですが面白くなつてきました。よろしくです^ ^

大会ミーティング

サイトと条一郎が自分達のキャンバスを作り終えると山田苗子先輩を除く夏の全道大会出場予定の部員達が部室に集まっていた。

サイトはキャンバスを自分の机の横のイーゼルに乗せると額の汗を拭つた。20号という大きさのキャンバスは近くで見ると壁のようになりきい。

夏休みの間、部室に来るたび、こいつと顔を合わせる事になるのか。サイトは生地の凸凹を爪先でなぞりながらそう思つた。後ろから松野が話しかけてきた。

「そうだ。サイト、キャンバスにジェッソはもう塗つた？」

「ジェッソ? サイトが聞き直すと松野は説明した。

「ジェッソを塗ると油絵のノリが良くなるんだよ。キャンバスと絵の具をつなぐ接着剤、ってところかな。先輩達が残していったのがあるからそれ、使いなよ」

それだけ言つと松野は自分の席に戻つた。なるほど。サイトはいつか大路地先生が教えてくれた棚からOBが残してくれたジェッソと描かれた

容器を取り出した。松野に使い方を聞くとサイトはジェッソを水で薄め、イエロー・オーカーという名前の油絵の具で色をつけて筆でキャンバスに

塗りつけ始めた。ジェッソと油絵の具を混ぜる必要は無いが、これから描く絵のイメージを膨らませるために有効だそうだ。大きめの筆で

2回、3回キャンバス全体を黄土色で覆うように筆で塗り終えるとこれからこの上に描かれるであろう大作の下地が出来上がった。

サイトが筆を置くと隣の席で大和と神崎が木のボードに画用紙を貼り付けている。「水彩画を描くにも準備が必要なんだよ」

そういうと神崎は画用紙の隅全体をマスキングテープで止め始めた。大和が水を用意するために水のみ場に向かった。そうか、水彩画も画用紙に水を馴染ませるために一度画用紙全体を水で塗らす必要があるんだつたつ。サイトはこの間の発表会で自分の絵に施した技法を思い出した。

大和が水彩画用紙に水でハケを塗り終わると1-2時を告げるチャイムが鳴った。「そろそろ休憩にしようよ」ノマ部長の掛け声で美術部員達は

学校の近所にあるバーガーショップへやつて来た。注文を受け取り部員達がテーブルを囲むとサイトが話を切り出した。

「やつと絵を描く下準備が出来たわけだけど、問題は何を描くかだよな。ともかくは何を描くか決めた?」

サイトの向かいの席に座った神崎が言つ。

「おれは今回も魚の絵を描こうと思つ。やつぱり描きなれたモノで勝負するのが一番だからね。」

「へえ。でも今回は魚一匹だけ描いて終わり、ってわけにはいかないでしょ?」

「うるせえなーまつんは何を描くんだよ?」

話に茶々を入れるように絡んできた松野に神崎が言い返す。松野はテーブルの上で手を組んで話し始めた。

「僕、来月で16歳になるんだ。」

「へえ、おめでと。」

神崎が興味なさそうに口にポテトを運ぶ。

「ありがとうございます。いや、そうじゃなくて僕は今回の大会で自画像を描こうと思つてるんだ。15歳の自分を作品として残せるのは今回の大会が最後だからね。そういう意味ではこのタイミングで夏の大会があつて本当に良かったと思うよ。うん。」

自分に世界に入り込むとする松野を挟んでサイトはバーラシェイクを吸つて大和に話を振つた。

「大和、お前は何描こうと思つてるんだよ

サイトの問いかけに大和は「まだ・・・秘密」といつものようにフフと笑いながら答えた。あのなあ、と言わんばかりにサイトは忠告した。

「おまえさあ、今回の大会は地底人の虐殺とかエイリアンの宇宙戦争とか、そういうグロい絵を描くのは止めてくれよな。おんなじ学校の俺達にまで採点が影響するかもしねないじゃん。」

サイトの話を聞いて大和は「宇宙戦争……いいね、それ……」と言いながらシェイクをかき混ぜながら大和は微笑んだ。ダメだ、こいつ。

テーブルのスミで所在なさそうにジュースをすすっている条一郎の背中を舞先輩が叩いた。

「大丈夫だつて、条一郎。大会を通して絵を描いてるうちに絶対上手くなるつて。ノマちゃんだつて入部したときは酷かつたんだから。『なんなのこれは！まるで小学生の落書きじゃない！』って大路地先生も驚いてたんだから！」

「あー、それは後輩の前で言わない約束だつていつたじゃん！」

口を膨らませて怒るノマ部長を見て部員達はケラケラと笑つた。へえ、先輩達にもそんな時代があつたんだ。感慨深げに部長を見つめるサイトに三上先輩が「そういうサイト君は何描くか、決めたの？」と聞いてきた。サイトはうーん、と腕組みをしながら考え込んだ。

サイトは夏休みが始まる当初、ビルや家などの建築物を大会で描こうと思つていた。しかし実際に雨宮家を描いたりしていふうちに

予想以上にそれが難しいことだという事を悟つた。柱の採寸をひとつ間違えるだけで建物の大きさがずいぶん変わつてしまつし、

なにより完成から逆算して色を塗り重ねていかないといふ事が参考書に書かれていたため、最初の油絵に建築物を描くというの

非常にリスクが高い気がした。サイトはしばしの考察の末、先輩に答えを出した。

「俺、今回の大会は風景画を描こうと思っています。」

「おおー、いいねえ。自画像に風景画。今年の新入部員は見所がある連中ばかりだね。これで心置きなく俺達も卒業できるよ。」

そうなんだ。先輩達はみんな3年生なんだ。その事を思うとサイトの胸にこれから美術部を背負つていかなければならぬといふ责任感が芽生えた。昼食をとり終え、学校に戻る道でサイトはどんな風景画を描くか、思考をめぐらせた。

大会ミーティング（後書き）

今回は会話に重点を置いて書いてみました。サイトがどんな絵を描くか作者も楽しみです^ ^

サイド、色々考へる。（前書き）

今回はあのキャラが登場します。

サイト、色々考える。

キャンバスを作った次の日、サイトは絵の題材を探しに函館に行くことにした。

駅のホームで電車を待つていると「あれ? サイト、サイトじゃね?」と声が聞こえたので振り返ると覗覚えのある姿があった。

「あれ、おな中の武田剛士。たけだたけし覚えてる? いやーなつかしいなあ。」

サイトに指をさす武田くんを見てサイトもあー、と指さしながら立ち上がった。中学の同級生の武田くんは地元の高校に進学したとメール

で聞いた。中学時代とは違つて少し垢抜けた顔をし、矯正器具の付いた歯を見せて笑つた。

「俺達ライブハウスの帰りなんだ。サイトはこれからどこに行くの?」

武田くんは後ろにいた2人に振り返りながら言った。ああ。武田くんは高校に入つてロックに目覚めて軽音楽部に入部したんだつけ。

4月に受け取つたメールの内容を思い出し、函館に行くよとサイトが答えると「サイトはなんか部活やつてんの?」と体臭を消すために

ふつた香水の匂いを撒き散らしながら武田くんが聞いた。

「俺、学校で美術部に入つてるんだよ。今日はこれから絵の題材を

探しに函館に行くんだ。」

武田くんが友達と顔を見合わせる。「おれ、なんか悪いこときいちやつたかな?」ガラの悪そうな武田くんの友達が含み笑いをする。

「美術部といやあ、クラスではぶられた奴らのすぐつじやね?」

「ばか。すぐつじやなくてそういう、つていうんだよ。気にしないで。こいつちよつじばかなんだ。またなんかあつたらメールしてよ。じゃあな。」

そういうと武田くんは仲間のふたりと一緒に去つて行った。武田くん、すっかり変わったなあ。俺も高校に入つて少しばられたかな。サイトは電車の席に座り、景色を眺めると考えにふけつた。世間一般から見て美術部の印象つてどつなんだ。やっぱり結果を出せなくとも

運動部やつてたほうが就職に有利だつし、絵を描くよりも音楽やつてたほうがもてるに決まつてる。「ミミコニケーション能力が無い人間

は社会でやつていけない」ということを就職相談の職員が言つてたのを思い出した。確かに毎年一回戦負けのサッカー部員でも体を鍛えて

いれば体力があるし、先輩、後輩に囲まれていればミミコニケーション能力とやらも自然につくだろう。一方、美術部員はどうだろう。

良い絵を作り上げるには自然と自分の世界にこもらなければならな

いし、ほとんどビーコンを部屋の中で過ごすため不健康極まりない。

そう考えると笑みがこぼれた。まつたく正反対じゃないか。会社に入つたら自分の世界観を振り回す新入社員なんて上司からみたら使い物じやい

ことこの上ないし、大和のような受け答えをするヤツなんて面倒臭くて相手にされないだろう。本当、俺達のやつてる事つて時代と逆走してるな。

サイトは自虐的に窓に額をこすつた。でもこれつて、すうじロックなことじやないか。なかなか他の高校生にはできないことだろ？

当事者であるサイトは思つ。問題なのはこれが一般社会では良く理解されてないことだ。「絵を描くだけじや食べていけない」詠進先輩が

言つていた本当の意味がわかつた気がした。そんなことを考えていると電車は函館に到着した。改築された真新しいホームから出るとスカつとした暑さが出迎えた。サイトは合宿の時に訪れた函館山を目指して歩き始めた。

サイト、色々考える。（後書き）

武田くんに関しては第1部にメールの文章だけが少し登場します。今回の話は作者が仕事場で口すつぱく「周りと「ミーティング」を取れ」と上司に言われているのでムシヤクシヤして書きました。後悔はしていません（笑）。真冬になりかけてますが、作中は真夏の日の出来事です・・・今年の夏を思い出して読んでください。なんつってね・・・

climb a mountain (前書き)

昨日、更新をサボったので2話連続で更新します。

サイトは海沿いの道を歩くと、条一郎が描いた赤レンガ倉庫を横切り、大清水先輩がノマ部長に告白した波止場を越え、傾斜のきつい坂を

登り、合宿で訪れた宿泊施設「ひまわり」の前まで辿り着いた。3日前に訪れたばかりになぜか感慨深い気持ちになつた。そういうえば

慈雨は元気かな。いけね、今日は雨宿家に行くんじゃなくて絵のテーマを探しに来たんだ。雑念を飛ばすように頭を振ると函館山の頂上に

ある展望台をサイトは睨んだ。今日は函館山を登りに来たのだ。とつひな考えに思えるかもしけないがサイトは今度の大会で風景画を描くことを

決めた。しかし、写真を見て絵を描くだけでは木々の美しさや風の感度、光の暖かさなど細かなニュアンスを伝えることが出来ない。

小説家の仕事の半分は取材、といったように絵を描くにも作者の実話に基づいた体験が必要だ。自然を感じるためには山登りが最適だ。

昨日寝る前

にそんなことをサイトは考えていた。函館山の登山口の前に立つとサイトは意を決したように息を吸い込んだ。この暑さのなか登りきれる

だろうか。一抹の不安とともにサイトの登山はスタートした。舗装された道の上を歩きながら頂上を目指して歩みを進めるとセリの合鳴が

サイトを出迎えた。彼らにとつて地上での1週間は土の中で過ぎた6年間と比べ、人生の絶頂といつべき大切な時間だひつ。海老の合ひ

大きい瞳を見慣れないサイトに向けると、羽をこすりあげ、他のオスよりもっと大きい音を出そうと一匹のセミは腹部を膨らませた。

山の中にはたくさんの木が立っている。春に咲く花をつける桜の木、夏に生い茂るアカマツ、冬にちいさな花を咲かすライラックの木など

一見同じに思える木にも色々な種類がある。木々の間に流れる木漏れ日をみてサイトは暖かい笑みを浮かべた。

しばらく歩くとサイトの周りを薄い大気が包み込んだ。呼吸が少しだけ苦しくなる。もしかして雲に入ったのかな。いやいや、そんなわけないか。

歩を進めると次第に道は狭くなり、強い風が侵入者であるサイトを拒むように体を揺らした。崖の下に木を落すと函館の町並みがジオラマの

よじにちこちく見える。死の誘惑に負けないで。一匹の黒アゲハチヨウがサイトの鼻先をすり抜けて飛ぶ。あなたが行くところはそつちじやないわ。

ひつひ、ひつちと言つよつに黒アゲハは道の先の大気の中へ消えて

いつた。せうだ、こんなとひひで立ち止まつていられない。崖辺の花が

美しいと人が思うのはそこで歩みを止めてしまつから、といづゆうな文を読んだことがある。もつと上にはもつと美しい風景があると信じたい。

その思いでサイトは頂上に向け足を進めた。

スタートして2時間弱、サイトは函館山の頂上の展望台へ辿り着いた。「あんれまー? あんた、こじまで登つてやつてきたのかい! ?」地元の警備員が田を白黒させる。若い登山者を見るのは珍しいそうだ。「自然を体感するため」に山登りをしたなんて説明したらこの人は

どんな顔をするだろう。展望台は観光客用の施設になつており自販機で買ったジュースを飲みながらベンチに腰掛けると一気に疲労感が押し寄せてきた。さすがに歩いて下山は無理だ。ロープウェイを使おう。地上についたら慈雨に「函館に来ました」つてメールしそうかな。

山を登り終えたことでサイトには自信が芽生えた。「うわー、すごーい!」観光客のカッフルの声につられ、サイトは窓から函館の町を

見下ろした。まさに100万ドルの景色。晴天の太陽が反り返った湾岸の海をキラキラと照らし、乾燥した夏の空気が函館の町並みをニスで

塗つたように明るくはつきりと瞳のレンズに映し出していた。この景色を毎日見れるのは天使と神様くらいだろう。サイトは持つてきたデジカメでそこから見える景色を撮影した。そして登山の途中で景色を撮影しなかつたことを少し後悔した。でも大丈夫。見てきた景色は

すべて頭のHDDに保存してある。案するより産むが易し、いや、論ずるより行うが易し、といったところか。サイトはこの登山により写真の中の自然ではなく実際のリアルな自然を体験できた。これを今回の大会で生かそう。興奮気味にロープウェイに乗り込むとゴンドラは

ものの15分でサイトの身を地上へ送り返した。はは。苦笑いを浮かべると絵のモデルを探すため再び函館の街を探索しようと思つたがさすがに疲れていたためこの日は大人しく家に帰り、次の日の昼間まで爆睡し、襲い掛かる激しい筋肉痛にサイトは身をゆがめた。

climb a mountain (後書き)

今回の話は作者が夏に函館に「取材」に行つて感じたことを書いてみました（詳しくはブログで！なんつてね）。文章を書くにあたつていい勉強になりました。これを機にオ斗の才能が覚醒するのか？作者も楽しみです^ ^

透明なセカイ（前書き）

作者です。調子が出てきました^_^

透明なセカイ

2日後、サイトが美術室に顔を出すとすでに松野はキャンバスに木炭で自画像の下書きを入れ始めていた。あいかわらずの手際の良さに感服すると

サイトは油絵セツトをロッカーから取り出すために準備室のドアに手をかけた。その瞬間、条一郎が「ちょっとまつたー！」と大声でサイトを制止した。なんだよ、と振り返ると間に合って良かつた、といつ風に息を切らせて条一郎は言った。

「中にいるんだよ。舞先輩が。」

「はあ！？」

サイトは顔を歪めた。あの先輩、また準備室に男連れ込んでイチャコラしてるとか。サイトの心を読み取つたように条一郎は続けた。

「それだけだつたらまだいい。脱いでもるんだよ。あの先輩。」

「はあ？！」

サイトが再び声をあげる。後ろにいた松野が説明した。

「舞先輩、今度の絵で自分のヌード画を描くんだつて。だから準備室は男子立ち入り禁止、ってわけ。カンベンしてほしいよ。ほんとに。」

やれやれ、という風に松野が手を広げる。なんてこつた。それじゃあ舞先輩が部屋から出でてくるか、女の部員が来るまで油絵セットが取り出せないじゃないか。サイトがため息をつくと条一郎の机の上にガラスの置物が置いてある。それを指差すと条一郎が教えてくれた。

「俺、今回の大会でこいつを描こうと思つてゐるんだ。ガラス製のカラス。だじやれじやないぞ。おやじの位置にあつたから持つてきたんだ。」

「へえ～。サイトがそのカラスを眺めていると松野が「面白い発想だけ透明のガラスを被写体として描くのは難しいと思つよ～。条一郎にそれが出来るのかな。」

といだずらつぽく笑つた。それを聞いて「馬鹿にするな」と条一郎が答える。今回の大会は彼にとつて結果の求められる大会になりそうだ。

しばらくすると「みなさーん、」にゅにゅちわー！ げんきい～？」とママ部長が部屋に入ってきた。サイトは部長に事情を説明した。

「にゅるほじ。そーいうわけだから私に準備室から油絵セットを取つて来て欲しいってわけ？」

「そうなんです。お願ひします。」

「だが、断る。」

シコつとした顔でポーズをとる部長に「お願ひします！ 部長だけが

頼りなんですー。」とサイトは泣きついた。「仕方ないなー」とこう
部長に

ロックカーの鍵を手渡すとノマ部長は準備室のドアをノックし、「舞
ちやん、こらー？」と廊の向こうに声を掛けた。「こらわよー」

舞先輩の声が返ってくるとノマ部長は静かにドアを開き「覗いたり
したら殺されるよ。タカジヨー。」と釘を刺してドアを閉めた。

残された3人は小声で話し始めた。

「舞先輩、中でどうこう風にして絵を描いてるのかな?」

「たぶん鏡を並べてそれに自分の体を写して描いてるんじゃないの
か?」

「そんな面倒なことしないで自分の裸、写真で撮ればいいの。」

「いや、この間性器が写ってる写真は店で現像できないとかなんと
か言つてたよ。」

「じゃあデジカメで撮つて自分でプリントすればいいじゃない。」

「でも、そんなのが出たら条一郎、家に持つて帰つて変なことに
使うだろ?」

「うそ。申し訳ないと思こながら使つてしまつと思へ。」

「やける條一郎を見てサイトと松野はやれやれ、と頭に手を置き、
ふうーと息を吐き出した。すると準備室が開き「みんな、なに話し

てたの～？」

と油絵セットを片手にノマ部長が飛び出してきた。条一郎が「世界の平和について、ですよ。」と意味の分からないことを口走ると自分の

席に座り、ガラスのカラスを見つめ始めた。

透明なセカイ（後書き）

条一郎のガラス製のカラスですが、ただ韻を踏みたかっただけです（笑）色々シソロヒヒのある話ですが良いモノが書けるよう、頑張ります^ ^

裸形のセカイ

サイトに油絵セツトとロッカーの鍵を手渡し、ジユティ＆マリーの曲を鼻歌で歌いつゝマ部長に松野が眉を歪めながら話出した。

「部長の方からこいつてくだせこよ。舞先輩のせいで僕達が迷惑してるつて。部屋の一つを私物化されたんじゃたまつたもんじゃない。」

ノマ部長は鼻歌を止めるといふと首を傾げて考え始めた。

「私が部長でエラいのは確かだけど、舞ちゃんは全道大会に出たりして結果を出してるからな。力関係では舞ちゃんのほうが私より上つてわけ。それに舞ちゃんがここでみんなの前でハダカで絵を描き始めたらどうする？。」

ノマ部長が口をすぼめると松野は顔を赤くして「それじゃ、仕方ないですね」と言つて視線を落とした。すると、「はいはい、迷惑かけて

「めんなさいね」といしながら準備室から舞先輩が現れた。バツの悪い松野が「先輩、今日はもう描かないんですか？」と聞くと

「今日は肌のハリが悪いからやめておくわ。それよりサイトへさ、もつ色塗り始めるの？」

先輩に聞かれサイトは事情を話した。

「いえ、俺油絵描くの初めてだから一度家で画用紙に描いてみてからキャンバスに描こいつと思つてるんです。だから油絵セツト、家に

持つて帰らつかと思いまして。」

サイトの話を聞くと松野が「へえ。描くの決まつたんだ。」と聞いてきた。

「やうなの。3日も休んだから私はてつきり函館の女の子とデートでもしてきたのかと思つたわよ。」

舞先輩が茶化すと「そんな訳ないですよ！函館に言つたのは事実ですけど、絵の題材を探しに函館山に登つてたんですよー。」

サイトが叫ぶと「一枚絵を描くためにそこまでするのかよ。すごいなおまえ。」と一条一郎が驚いて言つた。

「サイト、とうとう僕がいるフィールドに足を踏み入れたようだね。松野が不敵に笑みを浮かべて訳のわからない」と言つた。

サイトがカバンから写真を取り出すと「函館の写真？」と松野が聞くので「いや、近所で撮つた写真」とサイトは答えてその写真を松野に手渡した。そこには木が6本生えている雑木林の風景が写つていた。

「いい構図の絵だと思つけど……ちょっと周りが寂しそぎない？」

松野が尋ねるとサイトはふつ、ふつ、ふと笑みをこぼして言つた。

「木の間には俺が体験した風や光を擬似的に表現して描き加えようと思つてるんだ。写真には写つていらない鮮やかな世界。俺は今回の大会でそれを表現してみようと思つ。」

サイトの話を聞いて「おおー、なんだかかっこいい～」とノマ部長が拍手した。いやいや、それほどでも。そんなことを聞いたかったが不安もあった。見えないものを描くことが出来るだろ？が。いや、論ずるより行つが易しだ。とりあえず家で一枚絵を描いてみよう。部員達としまして談笑するといつまでは今日は午前中で学校を後にした。

裸形のセカイ（後書き）

前回と今回のタイトルは逆なような気がしますが、「わざと」です。年内中に完走できる目処が立ちましたので期待していくくださいー
^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4388w/>

Sea side Art clubber

2011年11月27日09時58分発行